
時の艦～時空の戦艦まほろば～

蓬萊艦隊司令長官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の艦〜時空の戦艦まほろば〜

【Nコード】

N70190

【作者名】

蓬萊艦隊司令長官

【あらすじ】

ある夜、若きイラストレーターの有賀信あるがしんは不思議な夢を見た。色の無い大海原に浮かぶ黒く大きな影と見知らぬ美少女。その少女は彼の名を呼んだ。その夢をきっかけに信は次々と事件に巻き込まれていく。そして、その事件を通して一隻の美しい大戦艦と、謎の少女と出会う。

大和型四号艦とは？

「まほろば」一体？

一人の青年と少女と、大東亜戦争を生き延びてきた謎の戦艦の物

語が時空を越えて今、はじまる。

【第一章・一枚の記憶】（前書き）

本作品は松本零士氏の漫画作品「超時空戦艦まほろば」の二次創作ですが、メカ設定、世界観、登場人物等に大幅な改編を加えております。ストーリーは実質的にオリジナルとなります。また、物語の舞台はあくまで私達の世界に準ずる所であり、地名などに違いがありますのでご了承ください。

【第一章・一枚の記憶】

やまとはくにのまほろば・・・

大和の国に生を受けし

大いなる力を持ちたる戦艦いくさぶね

陽の出る国に命芽生えし

理想郷の防人たる戦姫

やまとはくにのまほろば・・・

過去から未来へと広がる大洋わたつみを渡る時空の艦ふね

【第一章・一枚の記憶】

ひとつの記憶が永い眠りの中にあつた

最近になって、それ（、）は突然目を覚ました

太陽をさえぎる雲海の下

色彩を失った黒い海

その白黒の世界にただ一つだけ存在する巨大な影

いや、その影と共に在るもの・・・

一つの光・・・

影の傍に舞う光・・・

光はやがて人の形をおびはじめる……

少女……

光を帯びた……

長い黒髪を揺らした珠のような白い肌の少女が……

「シン……」

金曜の朝。

散らかったアパートの個室に目覚まし時計が鳴る。

盛り上がった布団の中からパジャマの袖に包まれた腕が伸び、ス
イツチを切る。やがて、掛け布団の中から眠そうな童顔の青年の顔、
あるが有賀 しんが 信の顔が現れた。

信は布団から完全に抜け出し、洗面台へ向かう。そして顔を洗い
寝癖を整える。（もとから癖ツ毛なのでこれがなかなか厄介だ。）
そして調理台で朝食の支度をする。（今朝はハムエッグとトースト
と牛乳。）

やがてテーブルには今朝のメニューが並ぶ。

「何だったんだ？あの夢は……」

信は、イチゴジャムを塗ったトーストをかじりながら今朝の夢の
ことを思い出していた。夢の内容を覚えているのも珍しいが、覚え
ているだけにやはり内容のほうに考えが行ってしまう。

それにしても、あの少女は一体誰なんだ。大体僕には彼女や女友
達がいたことがない。ましてや、あんな美少女なんて……いや、
しかしなんであの娘は僕の名前を知っていたんだ？……あの娘、

人間ではない感じだったような？・・・幽霊？いや、違うような？・

そして、少女の後ろにあったあの影は・・・何か、こう、とてつもなく大きくて重くて・・・

「げっ？」

信はハツとした。

「やばい。今日は原稿を出す日だ！」

信は駆け出しの売れないイラストレーターである。

食器を片付けもせずにチェックのシャツとジーンズに着替え、紙や鉛筆、消しゴム、筆やペン、ポスターカラーのチューブ、各種定規等が乱雑に置いてある机から、昨日徹夜して仕上げたA3サイズのケント紙を手取る。そこには大海原を征く鋼鉄の城『戦艦大和』と、大和を守るかのように蒼穹を征く『零戦』が描かれていた。

「よし。」

仕上がり具合を確認すると、トレーシング用紙にはさみ、図面ケースに入れて部屋を出た。

「おはよう。もうお出かけかい？」

「ずいぶん早いんだな。」

庭から、洗濯物を干しているアパート「桜木荘」の大家・渡辺忠治と大家夫人・好恵が声をかけてきた。

「ええ、新宿の方の出版社まで行って来ます。」

そう言って信は、新宿行きの電車に乗るために、アパートから2

00m程度離れている

ひがしおおがね

東大金駅へと向かった。

新宿駅で電車を降りて、歩いて30分ほどのところに出版社のビルがある。信はそこを目指して歩き始めた。

「なかなかいいですね。いつもに増して迫力がありますね。」

担当の社員は、素直な感想を述べる。

「いえ、ありがとうございます。まだまだ未熟な作品ですが。」
とは言うもの、信自身もいつもよりよく描けたと思っているように、まんざらでもない。

「しかし、一度はこんな戦艦に乗ってみたいものです。有賀さんもそう思うでしょう?」

担当は、根っからの海軍マニアで大艦巨砲主義者である。だから、『大和』や『アイオワ』、『ビスマルク』といった超有名な戦艦から『ガングート』、『リバダビア』、といったマイナーな戦艦まで知り尽くしている。

このような具合にしばらく談笑が続き、時計は十一時三〇分をまわった。

「はい。お疲れ様です。次回の巡洋艦『高雄』も期待していますよ。」

「それでは、これで失礼します。」

信は挨拶を済ませると、編集部を後にした。

喫茶店『オータムリーブス』。出版社のすぐ向かいにある小さいながらも簡易ステージやグラントピアノ、ドラムセットが置いてあり、落ち着いた色合いの照明がリラックスした空間を演出する粋な店で、信の行きつけの店だ。実家からの仕送りで何とか生活している信のささやかな贅沢の場である。

今日は珍しく空いていて信一人だった。

「マスター、ベーグルサンドとカプチーノください。サンドの具はサーモンとバジルチキンで。」

信はマスターに昼食を注文する。

「はいよ。信君は、うちのサンドが好きなんだな。」

マスター・石山頼三は筋肉質な腕をまくし立て、鮮やかな手つきで調理を始める。石山は、背が高く（一九〇センチ）、渋面で筋肉質なため、一見怖い。しかし、性格は温厚で、一緒に店で働く妻・静流と、中学生の息子・馨、娘・香織（双子）を愛する良き父親だ。また、大のジャズファンで、自らテナーサックスを演奏し（中学の頃から自前の楽器（高級品）を持っていた。）、その腕はかなりのものだ。しかも、ギターやベースも弾ける。

「はい。お待ちどうさん。」

信の前にベーグルサンド二種類とカプチーノが置かれた。

「合計で一五〇円だが、八〇〇円にしようとやる。」

石山マスターは決して楽ではない信の生活を考慮して、来るたび、まけてくれるのだ。

「あら、信ちゃんいらつしやい。」

マスターの妻・静流が昼休みを終えて厨房に姿を見せた。長い黒髪をなびかせた綺麗な女性だ。夫が四十七歳なのに対し四十四歳で三歳年下だ。しかし、二十代と見間違えるばかりの若さを保っている、独特の色気を放っている。

「新作のレアチーズケーキがあるの。お試しに食べてみない？ お代は結構よ。」

このような具合にうれしいおまけが付くことも多かった。

「いいんですか？ いつもまけていただいている上に、ケーキまでいただいて。」

「いいのいいの。遠慮しないで。それとも何？ チーズケーキとか苦手？」

「いいえ、大好物ですが。」

「じゃあ、よかった。」

「それでは、ケーキもゴチになります。」

「デザートに持ってくるわね。」

「まあ、俺と家内からのがんばっている若者に対する応援だと思って受け取ってくれ。家内の特製ケーキは美味しいぞ。」

石山夫婦の温かさに信は改めて感謝しつつ、美味しい昼食を楽しんだ。

信は午後の新宿の街を散策していた。原稿料も入ったことから機嫌がいい。

「おい、ちょっと金貸してくんない？」

後ろから二人のゴロツキに呼びかけられた。似合いもしない金髪に鼻ピアスの男と、リーゼントに薄いサングラスをかけた男だ。しかし信は無視する。

「なんだてめー、シカト？あ？」

「俺たち金なくて困ってんだよ。」

信は渋々返事する。

「金ならありません。自分に関わらないでください。」

せつかくの原稿料を、とてもこんな連中にわたすきになれないので、当然無いと言う。しかし、この手の連中はこのくらいでは引き下らない。

「ゴチャゴチャ言つてねーでさっさと金よこせ！」

教科書通り（そんな教科書は無いが）の逆切れである。

「ブツ殺されたくないければ、よこせよ！」

この程度の脅ししか出来ないボキャブラリーの乏しさ。

「いいから、どいてください。そろそろ帰らなくてはいけないので。」

「

信は、さっさと会話を切り上げようとゴロツキ共を押しつけていくとする。

「うわ、こいつバカだよ。日本語つうじねえ。」

いい加減うんざりしてきた信はさっさと走り出そうとする。

「いいから待てよ。」

「金置いてくだけでいいからよ。」

腕をつかまれた。

信は露骨に嫌そうに顔をしかめた。

そのとき、

「馬鹿な真似はやめい。みつともない。」

整えた白髪頭と、長い顎鬚が目を引く老人だ。白いジャケットを着込み、赤い蝶ネクタイを締め、ポークパイ・ハット（ソフト帽）を被り、ステッキを持った洒落た老人が、ゴロツキ二人に注意していた。

「なんだ、ジジイ！スつこんでろ！ブツ殺すぞ！」

「その若者を放してやったらわしも引き下がるう。」

鼻ピアスのゴロツキが脅しても老人は全く怯まない。

「はあ？ワケわかんねーし。」

リーゼント野郎の、これまた教科書通りの台詞。

「お前さんらがどんな事情かは知らんが、その若者が暴力を受ける理由はないはずだ。まあ、お前さんらのような者が人にたかる理由は大抵金だろう。ならば何故仕事を探して稼ごうとせん？恐喝ほど食えない商売はないということをお前さんらは知らんのかね？どうせ警察の厄介になるだろうから、結局は自分の首を絞めるだけなのだよ。」

老人は、ゴロツキ二人に穏やかな口調で説教する。しかし、ゴロツキ共はこういった理論的な話し合いで納得する人種ではない。

「うるせえー！殺されてえのか、ジジイ！」

リーゼントの奴は殴りにかかった。しかし、次の瞬間、

「・・・馬鹿め・・・」

老人のステッキはリーゼント野郎の鳩尾にヒットした。

「・・・！」

リーゼント野郎は、そのまま歩道に倒れこんだ。

「案ずるな。気絶したただけだ。」

老人は鼻ピアス野郎に向き直って言った。

鼻ピアス野郎は、怯えた表情で立ち尽くしていたが、老人を睨み付

けると、すかさずナイフを取り出す。

「調子に乗ってんじゃねーぞ！ジジイ！」

老人めがけて切りつけようとする。しかし、

「ぎゃあっ？」

鼻ピアス野郎が声を上げると同時にナイフは手から離れた。老人のステッキは、鼻ピアス野郎のナイフを持つ右手を突いたのだ。

老人は、歩道に落ちたナイフを素早く拾い、鼻ピアス野郎に、逆突きつけてやった。

「それなりの武器を持つておるようだが全く扱えておらん。つまり、貴様が逆に扱われていることになる。弱いものをいじめた経験は豊富なようだが、より強いものと戦う実戦経験は無しか。所詮は素人だな。ところで貴様は知っておるか？人間は、約三五%の血を失うと死に至るそうだ。」

老人の口調が穏やかなものから冷徹なものへと変わった。先ほどとはうって変わって、低くドスの利いた声だ。

「ジジイ、ためえ何者なんだ？」

鼻ピアス野郎は恐れおののき、震えた声で問う。

「わしは小さなものなら拳銃、大きなものなら軍艦の主砲や魚雷まで扱うことができる戦闘のプロだ。わしとて手荒な真似はしたくはなかった。貴様らの態度しだい事をもてなすに済ませてやったのだからいたしかないな……」

「やめろー！やめてくれー！」

鼻ピアス野郎は恐怖のあまり裏返った悲鳴を上げると、辛くもナイフから逃れ、歩道でノビている相方を引きずり、一目散に逃げ出した。

「覚えてやがれ！」

相変わらず教科書通りの捨て台詞。

「誰が覚えているか。大馬鹿者めが！」

そう言くと老人は、ふうーっとため息をつく。

「全く、ろくでもない輩だな。まあ、昔よりちとは治安は良いだけ

ましかの。」

老人はそう言うと、信に向き直り、穏やかな笑顔を向けて言った。
「その若いのが、大丈夫か？何か盗られたりしなかったかい？」

信は突然現れたやけに強い老人に驚きを隠せず、どもりがちにな
ってしまふ。

「あ・・・いや・・・だ、大丈夫です。盗られてませんし、けがも
ありません。原稿料も無事でして、その・・・」

「そうか。まあ、落ち着きなさい。」

「はい、すみません。・・・そして、あ、ありがとうございます。」
信はペコリと頭を下げ、深々とお辞儀をする。

「はっはっはっはっ・・・まあよい。君はさっきの連中と違って礼
儀がなっておるなあ。ところで、原稿料とな？君は漫画家さんか何
かなのかい？」

「あ、いえ、駆け出しの売れないイラストレーターですよ。」

信は頭を掻きながら言う。

「ほう！イラストレーターとな。どんな絵をお描きに？」

老人は、興味があるのかこの話題に深入りしてくる。

「えーと、ミリタリー関係のものが多くですね。軍艦とか飛行機と
か戦車とか・・・ほかに、帆船も車も風景も漫画調の人物も・・・
まあ、たいしたものは描けません。」

信は謙遜して言う。

「ほう！　すばらしい。多彩なもんだね。若いのによくやるもんだ
よ。ところで、失礼だが君の名前、聞かせていただけないかな？」

「あ、えと、有賀信と申します。」

「はて、有賀信・・・どこかで聞いた名前だが・・・」

老人は、しばし記憶をたどる。

「おお！　思い出した。『月刊みりたりー解体新書』の新しい連載
のコーナーで描いている若手の絵描きさんだね。申し遅れてすまな
かった。わしは東雲龍三と申す者だよ。」

老人は『月刊みりたりー解体新書』の読者で信のイラストのことも

知っていた。

「そうなんですか！・・・お恥ずかしい・・・あんなつたない絵で。」

信はまさかこの老人が読者だとは思ってもよらず、驚きを隠せなかった。

「なぜ恥ずかしいんだい？『軍艦レビュー』のコーナーの戦艦長門はすばらかったよ！しかも艦魂の『ながとちゃん』は美人で・・・わしのお嫁に・・・ぼっ（はあと）。」

何気にスケベな一面を見せるが、信にとっては自分のイラストを見てくれる人がいることの方がうれしかった。

「おじいさんは軍艦がお好きなんですか？」

「ああ。好きだとも。なにせ、実際に乗っていたからな。『高雄』、『金剛』、『山城』、『長門』、『武蔵』・・・様々な艦で、砲術士官をやっておった。」

東雲老人は、懐かしい思い出を一艦一艦の名前に思いを込めて語り始める。

「名艦ばかりですね！すごいなあ！」

東雲老人の華々しい乗艦暦に信は更に驚いた。

「しかし、今は彼女たちはもう・・・」

東雲老人の顔は少し悲しげに歪んだように見えた。

「おじいさんにとって軍艦たちは戦友だったんですね。」

信は東雲老人をいたわるように言う。

「やあ、すまんすまん。話を暗くしてしまったね。」

東雲老人は気を取り直して明るく笑う。

「ところで君、どこに住んでいるんだい？」

「え？東大金ですが。」

「そうかそうか。もしよかったら、わしの家にも遊びに来んか？」

「え？いいんですか？」

「大いにかまわんよ。わしの家は東大金より新宿寄りの三鷹にあるんだよ。まあ、たいしたもてなしは出来んがな。茶でも飲んでゆっ

くり話をしよう。」

「喜んで！あまりお氣遣いなく。」

信は、東雲老人の後を付いて行き、新宿駅で下りの電車に乗り三鷹へ向かった。

「ここが、わしの家だよ。」

東雲老人に案内されたその場所に、信は目を瞠った。そこは、二階建ての時代がかった洋館だった。鉄の門扉から、玄関までは三〇メートルほどはあるだろうか。玄関までの道や、庭へと伸びる通路には石のタイルが敷かれ、庭の花壇には、色とりどりの花達が咲き乱れ、家の建物の付近にはマロニエの木が植えられていた。

信は、自分の住むボロアパートと比べると天と地の差もあるような建築物にしばし唖然としていた。

「すぐにお茶でも淹れよう。どうぞ上がってくれ。」

信は促されるままに門をくぐり、玄関へと向かった。

玄関をくぐり室内に足を踏み入れると、そこは二階まで吹き抜けとなっているエントランスホールだった。ピカピカに磨かれた市松模様の石材の床には信の部屋の面積の倍はあろう赤い絨毯が敷かれていた。幅の広い階段の傍には白いグランドピアノが置かれており、天井からはシャンデリアが吊るされていた。

「お帰りなさいませ。だんな様。」

七三分けの髪型に四角い眼鏡をかけた端正な顔立ちの初老の男性が出迎えた。東雲家の執事である。

「ただいま帰ったよ。こちらは散歩中に知り合って意気投合した少年だよ。後でお茶を持ってきておくれ。」

「かしこまりました。」

「は、は、初めまして。有賀信と申します……。」

「信様。私は榊誠一郎と申します。どうぞよろしくお願い致します。」

榊と名乗る執事はよどみの無い爽やかな口調であるのに対し、信は新たな老紳士を前にあからさまに緊張していた。

「さあ、こちらだ。」

東雲老人は二階の自室へ招いた。

東雲老人の部屋は落ち着いた色合いの照明で照らされており、彫刻、絵画、置時計、帆船模型、古い地球儀、古楽器、宝石類、人形、ドールハウス、古い銃、日本刀、西陣織、鎧兜等、色とりどりの骨董品が並んでいた。

「おじいさんの宝物ですか・・・」

信は自分とはまるで縁の無い宝物の山に驚くことしかできなかった。

「ははっ。ジジイには古臭い趣味が似合うじゃろう。」

東雲老人は笑顔を絶やさずに言う。

信は大きな本棚に目を移す。そこには百科事典や軍事関係の書籍、文学、楽譜といったお堅いものが3分の2を占めている。しかし残りの、3分の1は明らかに場違いなものであった。

「漫画？」

信はぼつりと漏らす。

「わしは漫画も大好きでね。週刊誌もよく買ったり立ち読みしたりするものだよ。」

巨大な本棚の3分の1を占める漫画やアニメのDVDやゲームソフトは信も知っている作品が多かった。1970年代に登場して以来シリーズを重ねてきたロボット物、萌え要素満載の数多くの学園ラブコメ物、宇宙戦艦や可変戦闘機が活躍するSF物、ヒーロー、怪獣、スーパーメカが活躍する特撮物、戦争ゲー、格ゲー、シューティング、音ゲー、ボーカロイド等、老人とは思えないような内容であった。

「失礼ですが、このお年では珍しいですね。」

信は東雲老人には心底驚かされる。

「若い人の文化を“理解できない”で済ませたら勿体ないじゃろう。事実、若者は素晴らしい文化を生み出しているよ。よく、健全不健全で文化を語るえらそうな輩がおるが、そういうインテリ面した知ったかぶりは嫌いじゃ。健全不健全の両方の要素があつてこそ、玉石交じりであつてこそ、様々な要素が絡み合い、優れた文化を成形するのじゃよ。まあ、“健全育成”だとかほざいて子供を無菌室に閉じ込めておきたい輩には分かるまいがな。フオツフオツフオツ。」

東雲老人は信が思つていたよりはるかに感性が若いようだ。しかし、彼の主張は単純明快であり、年の功もあつて説得力があつた。

「味のほうはどうだい？」

二人は午後のティータイムを楽しんでいた。

「こんなに本格的なお茶をいただくのは初めてです。でも美味しいですね。」

信の緊張もほぐれてきたのか、笑顔が戻っている。

良い香りのお茶と手作りのクッキーで会話が弾んでいた。

「？」

信は飾られている絵の中の一枚に目線を止めた。

「どうしたんだい？あの絵かい？」

信の目線の先にある絵には大海原を駆ける一隻の戦艦が描かれていた。独特の勾配がかかった優美な船体に背負い式の三連装主砲塔や塔型艦橋、角度がついた煙突やマスト等から、大和型戦艦であることが見て取れた。

「おじいさん。あの戦艦……？」

信は東雲老人の表情の瞬時の変化に気付いた。

「おじいさん？」

「あ……いやあ、すまんすまん。あの絵は作者不明だね。題名も

知らないから、大和か武蔵のどちらかも分からないんじゃない。

東雲老人は温厚な笑顔に戻っていた。

「そうなんですか。それは残念です。」

しばらく二人の談笑は続いた。

やがて日が暮れ始めた。

「おお、こんな時間か。」

東雲老人は時計を見て言った。

「そろそろ帰らないと。」

信は席を立とうとした。

「ああ、ちよつと待ちなさい。」

東雲老人は信を止める。そして、懐からカードケースを取り出し、中身の一枚を信に渡した。

「渡し忘れたけど、私の連絡先だよ。」

渡されたカードはシンプルな名刺であった。明朝体で大きく『東雲龍三』と書かれていて、その他に職業名や自宅及び携帯の電話番号、パソコン及び携帯のメールアドレスがあった。商業は『骨董商』とある。信はこの部屋を見て納得した。

更に、赤外線通信で電話番号やメールアドレスの交換も行った。

「ありがとうございます。今日は色々とお世話をかけました。」

信は深々と頭を下げる。

「いやいや。こちらこそ老人のわがままに付き合ってもらって悪かったね。」

信は東雲老人に助けていただいたこと、お茶とクッキーをご馳走になったことのお礼を告げ、東大金のアパートへと帰路についた。

自室に帰り、夕食をとり、風呂に入る。風呂を上がったらパソコンをつけ、youtubeやニコニコ動画を鑑賞したり、2chを

まわったりする。

時計は十二時を過ぎようとしていた。

信はもう寝ることにした。

信は布団に入って今日の出来事を振り返る。

イラストを仕上た達成感。

優しい店主夫婦と美味しい昼食。

ウザいDQN共。

お金持ちで武術に長けた老紳士。

元軍人の老紳士。

絵が大好きな老紳士。

宝物の山に囲まれて暮らしている老紳士。

自分のイラストを気に入ってくれた老紳士。

若い感性を持った多趣味な老紳士。

もしかしたら、一カ月分の驚きをたった一日で体験してしまったのではないだろうか。

色々考えているうちに信に睡魔が襲ってきた。

信はカクツと眠りに落ち、寝息を立て始めた。

またあの影が見える。前よりもはつきりした形だ。

そして、またあの少女だ。

「シン……覚えてないの……?」

この少女に問いかけられたのは初めてだ。

しかし、信は全く面識の無い少女に「覚えてないの」と問いかけても言葉を見つけることができなかった。

「もう・・・時間が無いの・・・」

信には少女の言うことの意味が分からなかった。

「ねえ、君」

やっと口を開いたかと思ったなら情けない言葉であった。

「お願い・・・思い出して・・・」

そう一言残して少女と巨大な影は消えた。
後にはただ、闇だけが残されていた。

【第一章・一枚の記憶】（後書き）

ついに「俺流戦艦まほろば」こと「時の艦」時空の戦艦まほろば」連載開始です。定期的に連載できる保障はいたしかねますが、ニコニコ動画の「ハートマン軍曹シリーズ」を見て自分に鞭を打って頑張る所存ですので、今後とも何とぞよろしくお願い致します。

【第二章・胎動】

土曜の午前。

信は朝食を済ますと次回作の下描きにとりかかった。

題材は「重巡洋艦高雄」だ。大まかな構図やパースを決め、大まかな形を描く。そして写真や図面を元に細かいディテールを描き込んでいく。信は速筆なので、下書きはあまり時間がかからない。

「高雄」の下描きが終わるとライトノベルの挿絵（全七枚）の構図にもとりかかった。

時計は十一時半を回り、仕事に集中していた信の腹の虫も不満げに抗議の声をあげ始めた。

「ちよつとコンビニ行ってくるか・・・」

信は、どっこいしょと腰を上げ、近所のコンビニへ出かけた。

「今日はデミグラスハンバーグ弁当にすつか。」

あれこれ迷った挙句これに決めた。他に、作業用のチョコレート菓子やキャンディーも買った。会計を済ませるとすぐにアパートへと戻った。

「ふう、ご馳走様・・・」

信は弁当を平らげると食後のコーヒーをすする。

「なんか良いスレ立ってないかな？」

コーヒーをすすりながらパソコンを開き2chを見始めた。

「・・・えーと・・・ポチッと！」一番面白い都市伝説貼ったやつが優勝！（ボケ含む）『」

面白そうなテーマを見つけたのか、芝居がかった台詞でマウスをクリックした。

えーと、何々？

- 1 俺に彼女がいる。
- 2 東京都庁は宇宙から落下してきた宇宙船を改造したもの。
- 3 > 1 二次元だろw
- 4 > 2 このマクロスだよw
- 5 日本は三段変形できる戦闘機を開発中。
- 6 とある公園のボットン便所は平行宇宙への入り口。
- 7 > 6 無駄に壮大だなw
- 8 > 6 バロスwwww
- 9 日本KGBという組織がある。正体を知るものはいない。
- 10 > 9 は粛清されますた。

画面をスクロールしながら、スレッドを読み進んでいく。

「はっはっはっwろくなのがねえ。」

「ん？」

信は、ある一つの記事に目を止めた。

それは、異様に長い文章であつた。

140 大和型は三隻と言われているが、実際には全部で4隻完成している。「大和」「武蔵」「信濃」と後一隻あるが、終戦時に大和型の資料は殆どが焼かれたため、四号艦の艦名は不明。

信はひどく興味をひかれつつも、半分ネタだろうと思って読み進めるうちに、記事には信が予想だになかったことがまことしやかに書かれていた。

「四号艦」の初陣はレイテ沖海戦で、栗田艦隊の別働隊として参加していて、タイミングを計って栗田艦隊と合流してレイテ湾へ突入する予定だった。実際に、米海軍偵察機は栗田艦隊とも小澤艦隊とも500海里以上離れた場所に「もう1隻の大和型戦艦」の存在を

報告している。

そして、1945年4月6日、『天一号作戦』が発動し、伊藤艦隊の「大和」だけでなく「四号艦」にも連合艦隊参謀長草鹿龍之介中将が来艦し、「一億特攻の魁となれ」と告げた。艦隊司令と艦長はそれを苦渋の決断の上で受諾し、作戦に参加することとなった。

「四号艦」は伊藤艦隊の出撃に呼応して別のコースより沖縄に向かった。

しかし、大和が沈没する直前、『天一号作戦』の中止が「四号艦」にも伝えられ、反転することになった。反転する「四号艦」の艦橋からは大和の最期の爆煙が見え、「四号艦」の司令以下一同は連合艦隊の終焉を悟ったという。

しかし、一度だけ「四号艦」は敵艦隊と交戦した。遙か水平線にアメリカ海軍戦艦部隊を確認した。その中には「アイオワ級」四隻の姿もあった。「四号艦」艦長はすかさず砲撃戦を命じた。そしてついに「四号艦」の主砲が咆哮した。初弾はアイオワ級の一隻に峡又した。そして二射目のうち二発が命中した。

しかし、米海軍の公式記録には特攻機三機突入となっている。また、周囲に立ち上った水柱は航空攻撃による至近弾とされている。なぜか日米両国共に、交戦場所、日付けの記録が残っていない。

八月一日、日本は無条件降伏した。

しかし、「四号艦」は連合国に引き渡されることはなかった。唯一度だけの砲戦以来、姿をくらましていたのだった。

そして現在、太平洋を航行する客船やタンカー、艦船による「謎の戦艦」の目撃事件が何件もある。

ある日本国籍の商船が海賊の襲撃を受けていたが、海賊達は突然、何かに怯えるように逃走を開始した。商船の乗組員が海賊が指をさしていた方向を確認すると、「大和型」そっくりのシルエットをもつ戦艦が汽笛を鳴らしながらこちらへと向かってくるのが見えた。レーダーには全く反応が無かった。見張り員によると突然出現したという。戦艦は商船の横を通過しようとしたとき、突然濃度の高い

霧が周囲にたちこめた。しかし、霧は一分ほどで晴れたが、戦艦の姿も忽然と消えていた。

信はしばし読みいつてしまった。

しかし、読みいつているとき、ぞくりとしたものを感じた。

（誰か見ている・・・？）

信はあたりを見回すが何処から視線を感じるのかが分からない。

「疲れてるのかな？」

信はコーヒーを飲み干すとタオルケットをかけて昼寝をすることにした。

大分寝入ってしまったようだ。時計は五時を回っていた。

信はTVをつけ、ニュースを見ることにした。

すると、信に驚くべきニュースが飛び込んできた。

《午前紀伊半島沖にて所属不明の巨大戦艦出現！》

というテロップが映し出されている。

「紀伊半島の四〇〇キロ沖海上にて、国籍不明の巨大戦艦が出目撃されました。目撃者によると戦艦は全長約四〇〇メートル弱で、かつての戦艦大和によく似たシルエットを持っていたとのことですよ。」

信はアナウンスの内容はにわかに信じがたいものだと思った。しかし、ニュースを聞き進めるにつれて、話は具体性を増してきた。

目撃者による証言である。

「漁に出たらですね、天気がよかったのに突然霧が発生したんですよ。こんなことは初めてです。そしたらね、霧の中から汽笛と波を切る音がしたんですね。それで、相当でかい船だって分かりましたよ。でも、影が見えるようになったときには、あの大きさは全くの

予想外でしたよ。あんまりでかいんで、うちの船は全力で逃げたんですがね。そして後ろを振り返ると、またビックリしましたよ。戦艦大和そっくりなんですよ！」

目撃者の漁師は嘘を言っているようには見えなかった。興奮しているようにも怯えているようにも見えた。

「大きさはどのくらいあったんですか？」

取材班は漁師に尋ねる。

「多分四〇〇メートルくらいじゃないですか？ホントは大和はそこまで大きくはないはずですがね、でもあれは大和の形をしていましたね。」

漁師は何とか思い出している。

「戦艦はその後どうなったんですか？」

取材班は次々に質問を浴びせる。

「それがですね、うちの船の近くを素通りして、霧の濃い部分に入ったのが見えなくなっていましたね。それから二分位したら突然強い風が吹いて霧が晴れ始めたんですよ。そしてですよ。戦艦は忽然といなくなりました。レーダーにも何も映っていませんでした。」

信は驚愕の表情をしていた。なにしろ、2chの冗談半分で読んでいた記事の内容と同じことが起こっていたのだから。

信はすかさずパソコンを立ち上げ、「四号艦」について検索した。

『帝国海軍の極秘情報？～大和型四号艦～』

『連合艦隊復活か』

『幽霊戦艦出現』

などといったニュースやスレッドが乱立していた。

ここまでくると信は「嘘だ」とは一蹴できない。

「明日、おじいさんに聞いてみよう。」

信は、そう決意すると、夕食は簡単にレトルトカレーを作って食べた。明日を待ち焦がれるためか、あまりにも事が大きいニュースを見て興奮しているためか、あまり味わえなかった。

翌朝。

信は、朝食のハニートーストとベーコンとスクランブルエッグとコーンサラダをかきこむと、外出の支度をした。東雲老人に「四号艦」の話を聞くためである。

「しまった。昨日のうちに連絡を入れておけばよかった。」

昨日は興奮のあまりに連絡を入れるのを忘れていた。

「行ってから謝るしかないかな・・・」

信は、携帯と財布をポケットに入れ、鞆を肩にかけて部屋を出た。

《三鷹〜三鷹〜！》

電車内にアナウンスが響いた。

信は、電車を降りると真っ直ぐに改札を通過し、駅を出て、東雲老人の屋敷へ向かった。

東雲老人の自宅は駅からさほど遠くはなかった。

信は正門まで到着した。

そのとき、信は息を呑んだ。

門の付近にヤクザとおぼしき人相の悪いオヤジが二人いたのだ。

二人のオヤジはすぐさま信に気が付き鋭い目線を向けてきた。

「そこのお兄ちゃん。ここの屋敷の爺さんと知り合いかい？」

単刀直入に質問を投げかけてきた。

しかし、信は「YES」と答えるのは危険だと本能で察知した。

「いいえ、たまたま通りかっただけで。あんまり立派な洋館だったもので見とれていたんですよ。」

何とかそれらしく理由をつけて返事をする。

「そうかい。」

二人のオヤジはつまらなさそうに言うと、その場を離れて行った。

「いったい何だったんだ？」

信は訝しげに二人のオヤジが消えていった方を見た。

門に向き直って、鉄の門扉を押してみたが、しっかりと閉まっていた。開きそうにない。

それどころか、人の気配を感じなかった。不気味なほどにしんとしている。

信は仕方なくメールで連絡を入れてみた。

《今日お会いしたいのですが、お時間はありますか？あるとしたら何時にしましょうか？》

と簡潔に入力して送信する。

しかし、返信はなかなか来ない。

仕方なく、近所の店を回って時間を潰すことにした。

信は公園のベンチで、コンビニのサンドウィッチと缶コーヒーの昼食を摂っていた。そして、本屋で買ったライトノベルを読む。信がいつも楽しみにしているミリタリー系のシリーズで、およそ長門型と同世代の戦艦と少年少女の船乗りが活躍する海戦ものである。

「あー。軍艦に乗りてえ。」

信はシリアスな戦闘からゆるゆるな日常、あまつさえラブコメまで含んだテンポのよいストーリーに入り浸っているうちに、そう漏らした。

時計は午後3時半を過ぎた。

「うん！いい本に出会ったわあ！」

信は周囲から見ても幸せそうな笑みをこぼしながらそう言った。

実際、このシリーズは中学生や高校生の間でも人気があった。少し

前の年の「大和ブーム」と同時に発表された作品だが、本シリーズはブームの後も人気はさほど衰えることはなかった。一部の教師と良識気取りのPTAが「戦争を助長するから青少年に悪影響だ!」という根拠もなければ現実的でもない主張をのたまい出版社にイチヤモンつけたが、それを上回る数のファンレターやファンメールが作者の元に届き、出版社も変なクレームは一切無視することを貫いていたのだ。無理はなからう。こういった批判をするものに限って中身も見えていないのだから適当なレッテル貼りしかできないのだ。ともかく、ファンの熱い要望に応えて、何の支障もなく出版が続けられた。

「手紙を送ってよかったわ。焚書キチガイから本を守るのって気持ちいいよ。」

信もこのシリーズの作者の大ファンであり、現在出ている作品は全て持っていた。

信が悦に浸っていたそのとき、携帯電話にメールの着信があった。すぐさまメールボックスを開き、新着メールをチェックする。

《夜にならないと時間が空かないので今日は無理かもしれない。》
それを読んで信は一瞬落胆した。しかし、なんとかしてでも会いたいので再びメールを送ることにした。

《夜でもかまいません。今日は外食するつもりだったので。》
それらしい理由も添えて再び送信した。すると、返事はすぐに来た。
《では、7時に新宿の喫茶店「オータムリーブス」で会おう。夕食はご馳走するよ。》

「オータムリーブス」は信の行きつけの喫茶店であった。
ひとまず、アパートには帰りが遅くなるという趣旨の連絡を入れておく。

信は早速三鷹駅に戻り、新宿行きの電車に乗った。
知り合って間もなくだが、東雲老人に夕食に呼ばれることとなった。しかし、東雲老人のメールの文面には絵文字は使われていないため、

感情は読み取れなかったためなのか、期待感の他に一抹の不安があった。

新宿駅に到着し、電車を降りるとすぐに駅の外に出た。しかし、まだ時間があるので街を散歩することにした。

やがて日が暮れ始め、時計は6時半を回った。

「そろそろかな。」

信は喫茶店「オータムリーブス」へ向かった。

「よお、信君。うちで晩ご飯にするのかい？」

マスターの石山頼三は満面の笑みで信を迎えた。

「はい。実は7時にここで会う約束をしている人がいますので、その人と一緒に食べるつもりです。」

信がそういうと、マスターはカウンター席の二つを確保してくれた。信はその一つに座る。

「あら、信ちゃんいらっしやい。」

頼三の妻・静流がエプロンをかけながら出てきた。

「こんばんは。」

四〇台とは思えないほどの若さを保った美しい女性だ。信は頬を桜色に染めてうつむいてしまう。

「あっ！信お兄ちゃん、いらっしやい。」

「いらっしやい、信お兄ちゃん。」

石山夫妻の子供達も店を手伝っていた。

顔つきがそっくりな双子の兄妹で、現在中学一年生である。活発な性格は父親、顔の輪郭や目つき等の可愛らしい外見は母親に似たのだろう。

兄のほうが馨、妹は香織という。

二人ともいつも元気いっぱい、天真爛漫な少年少女だ。サックスが上手い父の影響なのか、馨はクラリネット、香織はフルートを吹

くのが得意である。なお、母親の静流もピアノが上手い。（しかも、皆ほかの楽器もできる。）

そのとき、新たな客がやってきた。

「今晚は。やあ、有賀君。待たせてすまないね。」

東雲老人だ。相も変わらず洒落たスーツ姿である。

「今晚は。僕も来たばかりですよ。」

信は一礼するとそう言った。

「提督、信君、何にしましょうか？」

マスターは注文を聞く。

「提督？」

信はマスターが東雲老人をそう呼んだことについて尋ねた。

「そう。提督。この人は元日本海軍の叩き上げの軍人だぜ。」

マスターは「叩き上げ」の部分に力をこめて言った。

「マスターもご存知だったんですか？」

信は少し驚いている。

「まあな。提督もうちの常連だし。うちのカレーの味は戦艦武蔵のカレーに似てるって喜んでおられたぞ。」

マスターはご満悦のようだ。

「さて、何にする？」

気を取り直してマスターは注文を聞く。

「好きなものを選びなさい。わしがご馳走するよ。」

東雲老人は信に先に注文させてくれた。

「ええ・・それでは、生ハムとサーモンのクリームパスタセットを

一つ。飲み物はアイスティーで。」

少し迷ってから食べたい料理を選んだ。

「わしは、きのこソースのあら挽きハンバーグセットをいただくよ。飲み物はカモミールティーにしておくね。」

二人は注文を終えた。

「はいよっ！」

と、威勢よく承るとマスターと静流は鮮やかな手つきで調理を始め

た。厨房にはいい匂いが漂う。生ハムとサーモンのクリームパスタセットときのこソースのあら挽きハンバーグセットはすぐに出来上がった。

「はいよ。お待ちどうさん。」

マスターと静流は出来上がった料理を二人に出した。

新鮮な食材を多用した料理は見るからに美味しそうだ。

「では、いただくよ。」

「いただきます。」

二人は湯気の立つ出来立ての料理にありついた。

「ところで、有賀君はなぜわしに会いたかったんだい？」

東雲老人が切り出す。

「え、えっと、軍艦のお話をお聞きしたかったので。あの・・・昨日ニュースでやっていた『四〇〇メートルクラスの大和型戦艦』とか。」

信は答える。

「ああ、わしもそのニュースなら見たよ。しかし、大和型の四号艦は『紀伊』だったはずじゃ。結局完成せず終いじゃったが。」

東雲老人はそう話した。しかし、信はどうも納得がいかなかった。

「しかし、興味深い話ではあるな。そもそも大和型戦艦は軍事機密じゃったから、わしも全て把握していたわけではない。『本当はもう一隻建造されていた』なんてことがあっても不思議ではないかの。」

信は「おや」と思った。東雲老人は四号艦の存在を真っ向から否定してはいないようだ。

「とはいえ、終戦の際に大和型の資料は殆どが焼き捨てられたからの。もう一隻あるという証拠もないよ。」

東雲老人はそう締めくくった。

信は確証が得られなかったため、少し落胆した。しかし、気を取り直してまろやかなクリームを絡めたスパゲッティをサーモンと一緒に

に口に運ぶ。

料理を平らげ、食後のお茶をすすっている頃、東雲老人は言った。

「マスター、リクエストいいかい？ サックスを聴かせておくれ。」

東雲老人も無類の音楽好きでもあり、頼三のサックスの腕前も知っていた。

「はい、提督。曲は何に致します？」

マスターはすぐに了承した。

「ダニーボーイがよいな。」

東雲老人が即答すると頼三は早速奥の部屋へ行き、サックスケースを携えて戻ってきた。

「静流、馨、香織、伴奏頼む。」

すると、静流はピアノの席に座った。馨はドラムの位置調整をし、香織はベースのアンプを繋いでいた。

「本格的ですね！」

信は、夜はこの店に来たことがないため、演奏を聴くのは初めてだった。

テナーサックスを持った頼三はバックの三人の前に立った。

「では、『ダニーボーイ』を・・・」

一言曲紹介すると、静流の流麗なピアノのイントロが流れ出す。やがて、香織のベースと馨のドラムが入り、サウンドに厚みを増してくる。

そして、サブトーンを効かせた、すすり泣くような頼三のテナーサックスが馴染みのある『ダニーボーイ』のメロディを歌いだした。世界的に有名なアイルランドの民謡で、ジャズやポップスの世界でもお馴染みのバラードナンバーである。戦場へと旅立つダニーを見送る母の気持ちを歌った曲とも、恋人の気持ちを歌った曲ともいわれており、スローなテンポで奏でられるそのメロディはすすり泣くテナーサックスによって、一層哀愁を帯びていた。

信は息を呑むような美しい演奏に、一心不乱に聞き入っていた。

演奏が終わるころには信は感極まって涙を流していた。

「すごい・・・初めてですよ。こんなに感動する演奏なんて・・・」
どのように褒めるべきなのか、言葉も見つからなかった。

「おいおい、そんなに褒めても料理か飲み物くらいしか出ないぜ。
最近はまだ練習してないんだ。」

「信ちゃん、これを機会にジャズに入門しない？」

頼三と静流が言う。

「いやいや。マスターもママさんも腕が落ちないもんだね。馨君や
香織ちゃんも上達が早いではないか。」

東雲老人はご満悦だ。

褒められた兄妹は頬を桜色に染めて、少し照れているようだ。

「馨君達はいつから楽器をやっていたの？」

信が兄妹に聞く。

「・・・えつとね、小学・・・」

「4年生の頃から・・・」

兄妹は少し緊張しているようだ。

「そうなんだ。結構長くやってるんだね。凄いなあ。」

信はそう言って二人の頭を撫でると兄妹は更に赤くなった。

「そんなことないよ・・・ありがと、信お兄ちゃん・・・」

「信お兄ちゃん、ありがとう・・・」

照れて頬を赤く染めている双子の兄妹は可愛らしい。静流さんの顔をそのまま幼くしたその容姿は美少年、美少女と言ってよい。

「もう一曲、聴かせて欲しいな。選曲は任せるから。」

信もリクエストを伝えた。

「うん・・・それじゃあ、香織。フルート持ってきて。僕はクラリ
ネット吹くから。」

「うん、お兄ちゃん。」

兄妹は自室に行き、各自の楽器を持ってきた。

クラリネットとフルートは、可愛らしい双子の兄妹を少し凜々しく
見せていた。

「それじゃ、木管二重奏で『ムーンライトセレナーデ』を……」
馨が曲紹介をすると、2人は楽器を構える。

クラリネットとフルートから月明かりのように優しく柔らかく、仄かなメロディが滑り出した。

グレンミラー楽団の大ヒットナンバーであり、今やビッグバンドの課題曲のようなものである。

所々で、お互いのソロを交えながら、お互いのシンクロしたビブラートをたっぷり効かせた流麗なハーモニーが流れていく。見事に息の合った演奏は幼さを残した兄妹を神々しく見せた。

最期に華麗なハーモニーが余韻を残して響き、兄妹の演奏は終わった。

少し間をおいて、信と東雲老人は盛大な拍手を送った。

「素晴らしいじゃないか！さすがだ！」

「凄いよ！カッコイイね！」

拍手を送りながら感嘆の声を上げた。

兄妹は嬉しそうな、はにかむような表情をして、ぺこりと一礼した。

「ありがとうございます……」

と言つて、簡易ステージを降りた。

そして、演奏は更に続いた。

頼三をフィーチャーして、『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』『ハーレムノクターン』『スターダスト』『酒とバラの日々』『木星』

馨をフィーチャーして、『メモリーズ・オブ・ユー』『鈴懸の径』『

アメイジンググレイス』『夜のストレンジャー』

香織をフィーチャーして、『ムーンリバー』『ひまわり』『ゴッドフアーザー』『愛のテーマ』『ロミオとジュリエット』『愛は花、君

はその種』

静流をフィーチャーして、『枯葉』『さくらんぼの実る頃』『愛の賛歌』『ワルツ・フォー・デビー』『スカボローフェア』

木管二重奏で『星に願いを』『トップ・オブ・ザ・ワールド』(4ビ

ートヴァージョン）』

四人のソロを交えた『L・O・V・E』『スタンド・バイ・ミー』等が演奏された。

いずれも洒落たスタンダードナンバーであつた。

「いやあ、懐かしいね。若い頃はむさぼるようにレコードを聴いたものだよ。」

東雲老人は満足そうに言った。

信はただ、ウツトリとしていた。

やがて、時計は9時半を回った。

「そろそろ失礼するかの。」

東雲老人は席を立った。

「そうですね。」

信も席を立った。

「ご馳走さま。料理も演奏も素晴らしかったよ。勘定はここに置いておくよ。」

東雲老人は満足そうに言った。

「ご馳走様でした。また演奏聴きたいですね。」

信もほくほく顔で言った。

「毎度ありがとうございやす。」

頼三は笑顔で見送った。

「お土産に新作のケーキもいかが？常連さんだから半額にしておきますよ。」

静流は新作のフルーツタルトをすすめる。

東雲老人は「ありがたくいただくよ。」と、購入を決定する。

「信お兄ちゃん、厳十郎おじいちゃん、また来てね。」

馨と香織も可愛い笑顔で手を振って見送った。

東雲老人は静流からケーキボックスを受け取り代金を払うと一礼した。信もそれに続いて一礼し、店を後にした。

「おじいさん。今日はご馳走様でした。」

信は満腹になった腹をさすりながら言った。

「いやいや。安いものよ。」

東雲老人は「気にするな」という雰囲気であつた。

美味しい料理と素晴らしい音楽に大満足の二人の足取りは軽かつた。

信は「オータムリーブス」から新宿駅に向かって二〇〇メートルほど歩いたところでふと気が付いた。今朝、東雲老人の洋館の正門の前で出会った柄の悪いオヤジの二人組である。信は目を合わせないように警戒した。

しかし、二人組のうち禿げ頭のスカーフエイスの男がこちらに気付いたようだ。それにつられて金髪のパンチパーマの男もこちらを睨んできた。

「まずいな。やつらにつけられたかも知れん。」

東雲老人も二人組に気付いたようだ。

「おじいさん。何ですか？あいつら・・・」

信は東雲老人の耳元で囁いた。

「ここ最近わしを追っている連中だ。」

東雲老人も小声で囁いた。

連中はこちらへじりじりと向かってくる。

信は命の危機を感じた。

「有賀君、ケーキは持っていてくれ。」

「どうするんですか？」

信は東雲老人からケーキボックスを受け取りながら訊いた。

「一戦交える覚悟が要るな。」

東雲老人はきつぱりと言う。

「お、おじいさん！」

「君は下がっていなさい。」

信は止めようとするが東雲老人の目は獲物を狩る猛禽の目になっていた。

信は出来るだけ連中から目立たない茂みと街路樹の影に隠れた。そして、そこで聞き耳を立てた。

「爺さん、ちよつと俺達と来てもらえないかな？」

「なあに、ちよつと話があるんだよ。」

二人の柄の悪いオヤジは東雲老人に食いついてきた。

「何の用だい？わしは夕食を終えて気分がよいところなのだよ。邪魔はしないでくれ。」

東雲老人は不機嫌を装って二人組の出方をうかがっている。

「いいから来いよ！」

「話だけつつつてんべ！」

二人組は周囲に多くの通行人がいるのに関わらずすぐに逆ギレした。

「嫌だと言ったらどうするおつもりかな？」

東雲老人は紳士的な態度を崩さなかった。

「うるせえ！こいつが見えねえのか！ああん？・・・つて、痛え！」

ハゲ頭の男は拳銃を見せて脅しにかかったが、東雲老人のステッキが拳銃を持つ右手を鋭く突いた。ハゲ頭の男は突如の激痛に拳銃を落としてしまった。すかさず東雲老人は拳銃を奪った。

「調子に乗るなよ！このジジイ！」

金髪の男は自らも拳銃を手についた。しかし、次の瞬間、ダアン！

と鋭い銃声が辺りにこだました。

弾丸を放ったのは東雲老人の銃だった。弾丸は金髪の男の拳銃を破壊した。

金髪の男は「ヒイツ」という情けない声を上げて破壊された拳銃を手放した。

「有賀君、行くぞ！」

東雲老人は信に呼びかけた。

その直後、信は街路樹の陰から飛び出し、東雲老人と共に全力疾走で走り出した。

「クソツ！逃がすな、追え！」

二人組は一瞬呆然としていたが、全力で追い始めた。通行人たちは怯える者、悲鳴を上げる者、野次馬根性丸出しの者等、様々な反応を見せてこの辺り一帯は大騒ぎになった。

「おじいさん、どこに逃げるんですか？ 駅を通り過ぎましたよ！」
信は走りながら訊く。

「ひとまず、わしの家までかな。」

「そんな！ 走ってですか？」

「その心配いらんよ。」

「？」

信は「？」マークを浮かべなが東雲老人の後を追った。そのとき、一台の車がこちらに向かって突進してきた。信は一瞬ぎよっとしたが、東雲老人は車に向かって手を挙げた。

目の前に停止した車はVIPの移動手段の一つである、いわゆる「リムジン」である。長身の車体を持つリムジンから一人の水兵らしき少年が降りてきて、素早く東雲老人を乗せる準備をした。同時に運転主席の窓が開き、日本海軍の制服姿が顔を出した。見覚えのある顔の初老の男性である。

「だんな様、信様、早く！」

「榊さ・・・」

言い終わる前に信は東雲老人と少年水兵の手により車に乗せられた。そして東雲老人も素早く乗り込んだ。

「少々手荒にいきます。」

一言言うと榊はリムジンを急発進させた。

「榊さん、どうしてここが分かったんですか？」

信はリムジンを駆る榊に訊いた。

「だんな様のバッジには発信機が仕込まれております。これは時計回りに回転させると作動する仕組みになっております。そして、リムジンには受信機がありますから、だんな様の所在が分かるのです。」

「

ハンドルをさばきながらも榊の口調はよどみの無い爽やかなものであった。

「受信機はこれ。」

通信兵を担当する水兵姿の少女は自分が扱っている機材を見せた。携帯電話くらいの大きさである。それがノートパソコンに接続されている赤い点は自分達が乗っているリムジンだろう。

「榊大佐、追っ手が来ます！」

先ほど信を乗せてくれた少年水兵は運転手に報告する。

彼はよく後方に目配りをしていたのだ。

信と東雲老人も後ろを確認する。

追っ手はいた。黒塗りのBMWは乱暴な車線変更や割り込みをしなからこちらに向かってくる。

「しつこい奴らだ。」

東雲老人はウザそうに顔をしかめる。

「司令、大佐、いかがいたしますか？」

少年水兵は指示を仰ぐ。

「司令？」

信は東雲老人のことかと理解した。

「今は振り切るほうが優先だ。周囲の車を巻き込んでならん。」

東雲「司令」は攻撃を控えさせた。

「では、住宅街の狭い道に入りますか？」

榊が意見を具申する。

「住民には迷惑だが仕方が無い。」

「了解しました。」

榊は東雲老人の指示に対し即答する。

榊は住宅街の中の道にリムジンを飛び込ませた。しかし、黒いBMWもしつこく食い下がってきた。

「うっとおしいやつめ。」

「下手糞のわりにはしつこいですな。」

東雲「司令」と榊「大佐」は悪態をついた。

しばらく住宅街を走ると、前方にはドブ川がありＴ字路になっていた。ドブ川沿いの道は広くなっていた。榊は鋭いハンドルさばきで見事にＴ字路を曲がりきった。

一方、黒いBMWはドブ川沿いのガードレールにぶつけながらもなんとか方向を持ち直した。

「奴らが撃ってきます！」

少年水兵が報告する。

黒いBMWの窓からハゲ頭の男が拳銃を出していた。
ダアン！ダアン！

と見境なしに乱射してきた。

しかし、このリムジンは防弾ガラスや拳銃の弾程度は防げる装甲が施してあったため、かすり傷を負わせたに過ぎなかった。

「よし、君達、存分にやれ！」

東雲老人は指示を下した。

「はっ！」

「了解。」

少年水兵はサブマシンガンの安全装置を解除し、少女水兵は四一口径の自動拳銃を手に取り側面の窓を開けると、黒いBMWに向かって容赦の無い銃撃を加えた。

ダダダダダ・・・

ダアン！ダアン！

と耳を劈くような銃声がこだまする。銃弾は黒いBMWのエンジンルームと前輪に多数命中した。

黒いBMWはエンジンルームを炎上させながらバランスを崩し、ガードレールを壊してドブ川へ盛大な汚水の水柱を立てて頭からダイブした。

「よし、ここからは普通に走ってくれ。」

「かしこまりました。」

東雲老人と榊の言葉に一同は安堵した。

リムジンはやや遠回りになりながらも東雲老人の自宅へと向かった。

リムジンは東雲老人の自宅へ到着した。

リムジンは裏口から敷地へと入っていった。

しかし、辺りを見ると見ると信は息をむ光景が広がっていた。

石のタイル敷かれた庭の広場には、美しい洋館には不釣り合いな軍用
と思しきパジエロや大型トラックが数台停車しており、物々しい空
気が漂っていた。

周辺で荷物の積み込みの作業をしている兵士や士官の制服のデザイ
ンは現在の自衛隊のものとは違っていた。どちらかというと旧帝国
海軍の詰襟やセーラー服に近かった。

信は車を降りるなり、将兵から騒がれた。

「何だ？あの少年は。」

「まずいぞ！軍事機密が漏れるかもしれん。」

将兵は口々に言い出した。

そのとき

「心配はいらん。」

東雲「司令」は騒ぐ将兵たちを制した。

「あれは、わしの友人じゃよ。榊君、屋敷に入れておあげ。」

「かしこまりました。どんな様はいかがいたしますか？」

「わしは着替えてから行くよ。」

信は榊に連れられて東雲老人の自室へ向かった。

信は、改めて榊の方を見た。大佐の階級章が付いた濃紺のボタンな
しの詰襟に桜と碇のエンブレムが入った制帽や短刀からなる「士官
第一種軍装」は榊の初老ながら端正な顔立ちやスマートな体のライ
ンを凛々しく見せていた。同性である信も見惚れるほどだ。

「我々はそろそろ休憩しますから信様もお茶でもいかがですか？」

今一状況が飲めない中、信はお茶に呼ばれることになった。

信は榊「大佐」に案内されて、おとといもお邪魔した東雲老人の自室へと足を運んだ。

そして、大事に抱えていたケーキボックスをテーブルに置いた。

「こちらでお待ちください。ただいまお茶をお持ちします。」

そう言うのと榊は部屋を出て行った。そして、入れ替わるように東雲老人が入ってきた。

「やあ、有賀君。驚かせてしまつて申し訳ない。」

少将の階級章が付いた士官第一種軍装をまとつた東雲老人はいかにも叩き上げの海軍軍人という風格が漂つていた。しかし、その風格のある少将は本当に申し訳なさそうに言う。

「いいえ、僕のほうこそ今日突然連絡を入れましたし、あまつさえ大事なところを勝手に見てしまいました。」

信は、東雲「少将」に頭を下げられていることに猛烈な違和感を覚える。かえつて申し訳なかった。

「だんな様、信様、お茶をお持ちしました。」

二人ともばつが悪そうにしていると榊「大佐」が香りの良い紅茶が入ったポットとティーカップを携えてやつてきた。

「おう、ありがとうございます。」

東雲「少将」はケーキボックスを開けた。

「改めて見ると随分大きなフルーツタルトだな。榊君もどうだね？」

「ありがとうございます。喜んでいただきます。」

榊「大佐」は深々と礼をする。

「あと、今日の護衛に来てくれた子たちも呼んでおあげ。」

東雲「少将」は先ほどの水兵の少年少女もお茶に呼ぶことにした。

「かしこまりました。」

榊「大佐」はすぐに二人の水兵を呼びに行った。

「二人ともご苦労だったね。わずかしが入っていないが取っておきなさい。」

東雲「少将」は二人の水兵に金一封を渡した。

「ありがとうございます。」

二人は笑顔で受け取った。

リムジンの中でこそ無愛想な印象があつた二人だが笑うと年齢相応の少年少女らしい、可愛らしい笑顔だった。

「まあ、座りなさい。オータムリープスの奥さんの新作のフルータルトがあるから食べていきなさい。」

東雲「少将」は二人を座るようにすすめた。

二人の水兵は「失礼します」と一言言つて椅子に腰掛けた。

榊「大佐」はフルータルトを切り分け、ケーキサーバーで皿に盛り付けていた。

「君達、自己紹介しなさい。」

東雲「少将」は信と二人の水兵に自己紹介を促した。

「え・・えつと、僕は有賀信と申します。年は二一歳で、駆け出しですがイラストレーターをやっています。どうぞよろしく。」

信はそう言うとおぺこりとお辞儀をした。

「彼は民間人だがわしの新しい友人だから心配はいらんよ。仲良くしてやっておくれ。」

東雲「少将」は心憎いフォローをしてくれた。

「私は一等水兵の櫻井翔子です。一六歳です。よろしく。」

少女のほうの水兵は櫻井翔子という。セミロングの黒髪からのぞく卵型の輪郭の色白の顔、やや釣り目気味の大きな目、小さめの桜色の唇が可愛い少女だ。

信は翔子の可愛い笑顔を見てドキツとした。

「俺は長谷川潤。階級は一等水兵です。一七歳つす。よろしく。」

少年のほうは長谷川潤という。背丈は信より若干高いくらいだろうか。それなりに整った顔立ちで、太めの眉が凛々しく、澄んだ瞳の少年である。

「さあ、自己紹介が済んだところでお茶にしよう。」

東雲「少将」は優しく言つた。

「毎度ご馳走になつてすみませんね。」

普段の生活が豊かとはいえない信だけに、ご馳走になつてばかりいるのは有難さを通り越して申し訳ない気持ちにすらさせた。

「いいえ、主のお友達を丁重におもてなしするのが私どもの仕事ですから。それにあなたは、お若いのにイラストレーターとして大変立派に活躍されているではありませんか。」

榊は爽やかな笑みを絶やさずに言った。

「そんな立派なものでもありませんよ。」

あまりにも真面目に褒められたので信の顔は赤い。

「私も、あなたのイラストは何度が拝見しました。今月号の『戦艦長門』は素晴らしい作品でしたよ。そして、漫画もお描きになつてらっしゃいますね。私も来月号が楽しみなんですよ。」

信の作品を気に入ってくれた人はここにもいたのだ。信は感動のあまり涙が出そうであつた。

「長話で申し訳ありませんでした。どうぞお召し上がりください。」

榊は紅茶をカップに注いで、レモンとミルクと角砂糖を添えて渡してくれた。やはり、本格的な紅茶は美味しい。

また、静流さんの手作りのタルトも、フルーツが瑞々しく、カスタードクリームも優しい味でタルト生地もこんがり焼きあがつており、絶品であつた。

お茶をすすりケーキ食べながら東雲「少将」や榊「大佐」、翔子、潤と談笑し、楽しいティータイムが続いた。

しかし、おとといも見た「大和型戦艦」の絵がふと気になつた。

優美な曲線を持つ船体に、強く輝く3連装主砲塔や天守閣よろしくそびえ立つ塔型艦橋、マスト、煙突がバランスよく配置された美しい戦艦である。それが太平洋の荒波を蹴散らして、軍艦旗をはためかせ、もうもうと黒煙をあげ疾走している。海の色も様々な青や緑を使い、非常に味のある色合いに仕上がっている。

「力強いだけではなく……凄く綺麗だ……戦艦をこんなに綺麗に描けるなんて……」

信は絵に夢中で見入っていた。

「……でも、何だろう……大和でも武蔵でもないように感じるけど……」

つい感想を漏らしてしまう。

「有賀君……」

東雲老人に声をかけられ信は向き直った。しかし、その瞬間ぞっとした。

そこにはいつもの温厚な老紳士の顔は無かった。そして、榊「大佐」も翔子も潤も怒っているようにすら見える真剣な表情をしており先ほどの和やかなムードは消え去った。

「おじいさん？皆……？」

信は声が震えていた。

「あれは……大和でも武蔵でも……ないよ。」

東雲老人は言うのを躊躇っているかのようにだった。

「架空の戦艦なんですか？」

信はいつもと違う東雲老人に遠慮がちに聞いた。

「いいや……実在する戦艦だよ。」

再び絵のほうに向き直る。

「……？……？……？」

信はさつきから感じていた違和感の正体に気がついた。

「大和じゃない！」

そこに描かれていた大和のような戦艦には、主砲塔が五基もあった。

「東雲司令、よろしいのですか？」

翔子は尋ねるが、東雲「少将」は続けた。

「もう、隠しても仕方が無かるう。その艦が戦艦『まほろば』だよ。」

東雲「少将」の口から聞こえた艦名は聞いたことがないものであった。

彼は、さらに続ける。

「大和型の四号艦……『大和』『武蔵』『信濃』……そして、

『まほろば』だ！正確に言えば超大和型の一号艦。まほろば型の一号艦だ！」

いつもの温厚な口調からは考えられないほど厳しい口調で一氣に言い終えた。

「戦艦まほろば・・・それじゃ、ニユースでやっていた『四〇〇メートルぐらいの大和型戦艦』って・・・」

信は昨日のニユースのことについて触れてみた。

すると、予想通りの答えが返ってきた。

「さよう。それが『戦艦まほろば』だよ。そして、現在の『まほろば』の艦長がわした。」

東雲「少将は」はつきり答えた。

「そして私、榊誠一郎は副長です。」

榊「大佐」も『まほろば』の関係者だった。

「俺は、砲術科勤務だよ。」

「私は航海科。」

潤と翔子も自分の所属を明かした。

信は、もうどのように反応してよいのか分からなくなった。何故だろうか。

2chで面白半分に取り上げられていたことが事実だからか。

自分の中にある大和型戦艦の概念が崩れたからか。

『四号艦』こと戦艦『まほろば』の関係者が四人も目の前にいるからか。

とにかく、これが「ドッキリ」の類だとは思えなかった。

「有賀君。君はこれからどうしたい？」

東雲「少将」は信に問いかけた。

しかし、信には質問の意味がいまひとつ分からなかった。

「何でも良いんだよ。こういった状況に置かれている君の考えを聴かせて欲しいんだ。」

「ぼ・・・僕は・・・」

信は戸惑いつつも口を開いた。

「僕は、事実を知りたい。『まほろば』とは一体何なのか、なぜこの時代に存在し続けるのか、『まほろば』は何処へ行くのか……知りたいです。」

信は心の内を四人に話した。後のことなど考えていなかった。ただ、「知りたい」という気持ちが強く、他は何も無かった。

信が心の内を明かした後、しばしの沈黙があった。

「そうか。」

東雲「少将」は沈黙を破った。

「正直なところ、わしはその答えを待っていたよ。」

信にとっては意外な答えだった。いや、信どころか榊「大佐」や潤、翔子も意外そうな顔をしていた。

「だんな様、よろしいのですか？」

榊「大佐」は心配そうな顔をしていた。

「あの……」

信が再び口を開いた。

「先ほど言ったことについてですが、まだ心の整理が……」
迷いが無いわけではなかった。

「わかっておるよ。」

そう言つて東雲「少将」は懷から何かを取り出した。それは一見懷中腕時計のようなものであった。

「もし、決心がついたらこのカバーを開けて中の金色の桜型のキイを押しなさい。必ず迎えが来る。ただし、期限は今日を除いて三日後とするよ。」

信は、それを大事にポケットに仕舞った。

今日はもうアパートに帰ることにした。

【第二章・胎動】（後書き）

「大和型戦艦」の絵の正体は「戦艦まほろば」でした。

それにしても今回は喫茶店「オータムリーブス」での生演奏の描写に凝ってみました。はい。私はジャズファンですともw。したがってサックスも吹きます。

え？何？馨君と香織ちゃん？

ええ。そうです。私は二次元ではバイセクシャルなので美少年と美少女の双子にしましたが何か？

【第三章・若者の決断】

アパートに帰り着いたところには時計は深夜一時を過ぎていた。今日はあまりにも色々なことがありすぎて疲れたのか、すぐに深い眠りに落ちた。

「信・・・思い出そうとしてくれたの・・・」

また、あの少女が現れた。

信は、今回は比較的落ち着いていた。

「君は誰なの？なんで僕を知ってるの？」

信は少女に尋ねる。

「思い出そうとしてくれて嬉しい。」

少女は一方的に話していた。

「思い出すって、何を？」

相変わらず少女の言っていることは分からなかった。

「でも、もうちょっとだけ待ってる。もうちょっとだけ・・・ね。」

そう言う少女は闇へ消えた。

次の瞬間、闇の彼方から何かの音が聞こえてきた。機械音交じりの波を切る音が次第に大きくなってきて、こちらに近付いてくるのが分かった。信は直感で「船が近付いてくる」と思った。

汽笛の音が聞こえた瞬間、闇は一瞬にして晴れ、白い積雲が浮かぶ青空と大海原が視界いっぱいに広がった。

そして、視界の中央には「音」の主がこちらに向かってくるのが見えた。

巨大な戦艦が波濤を蹴散らし、主砲を輝かせ、軍艦旗をはためかせながら全速力で疾走していた。

『大和型』によく似たフォルムだが、主砲の数が十五門あるのが分

かる。

戦艦は信の目の前を通り過ぎていく。あまりにも巨大だった。三〇〇メートルどころか四〇〇メートルはありそうだ。

戦艦の艦尾が見えてきた。そこには艦名が書かれていた。

『まほろば』。

東雲「少将」から聞いた名前だ。

「あれが、『まほろば』・・・！」

翌朝、目を覚ました信が最初に発した言葉だ。

夢には違いないのだろうがあまりにもリアルな夢だった。夢の内容もはっきり覚えている。戦艦『まほろば』の圧倒的な存在も肌身で感じた。

信は、興奮と不安を抱えながらも朝食を作る。今朝は目玉焼き二つとコーンスープにスパゲッティサラダにクロワッサンだ。クロワッサンは「オータムリーブス」からのおすそ分けである。

料理が出来上がるとすぐに食べる準備をした。信は食欲はあるほうで（といっても童顔の痩せ型だが）、朝昼夕の三食は欠かさない。「ひとまず、食べて考えよう。」

と言いつつコーンスープをすすった。

朝食と片付けが済んだらいつものイラストの仕事にとりかかった。一昨日下午書きを済ませた「巡洋艦高雄」の着色作業に入った。まずは淡い色で全体的に大まかに色付けしていく。それが乾いたら次の着色作業に入る。信のイラストは殆ど手描きであり、非常に地道な作業である。

大まかに着色を終えると、「高雄」は少し寝かせることにした。

「『まほろば』・・・か。よし。」

信はA2のケント紙を取り出し、鉛筆を走らせた。下書きはすぐに出来上がった。十五門の主砲を左舷に振りかざし、大仰角をかけ、今にも巨弾と発射炎を吐き出しそうな戦艦『まほろば』の勇姿が描かれていた。

「うん。我ながらこれはなかなか。」

信は描きあがった『まほろば』を気に入ったようだ。

作業を進めている間にだいぶ時間が経っていたようだ。時計は十一時を過ぎていた。

「ちと早いけどお昼にするかな・・・」

信はスパゲッティの乾麺を茹で、レトルトのミートソースを鍋で温めた。そして、すぐに皿に盛り付けてテーブルへ運んだ。

「ポチツとな。」

とTVのリモコンのスイッチを押し、TVをつけた。昼のニュースや「笑っていいタモ」を見るためだ。

《昨日の午後9時半頃、新宿方面で二台の乗用車の暴走がありました。》

信はぎくりとした。

TVをつけた瞬間、昨日体験する羽目になったカーチェイスの件が報道されていた。

《前方を走っていた車は所属不明のリムジンで、後方を走っていたのは暴力団が所有するBMWだったとのこと。》

あのBMWはやはり暴力団だったらしい。

《住宅街の住民によると、二台の暴走車両は銃撃戦を行っていたとのこと。住宅街の用水路に転落したBMWからは、多数の弾痕が確認されました。》

画面には大破したBMWが映し出された。

《警察は、逃走したリムジンの行方を追って現在搜索中とのこと。》

信は東雲「少将」達が心配になった。しかし、電話をかけることは

はばかられた。「決心はついたか？」と聞かれるかもしれないからだ。

「どうすればいいんだよ・・・」

信はテーブルの上で頭を抱えた。

しばらくそうした後、すっかり冷めたスパゲッティをもそもそと食べ、冷やした緑茶を一杯飲むとごろりと横になった。

東雲邸。

東雲艦長と榊副長は紅茶をすすり、チョコレートをつまみながら現状について話していた。

「艦長、警察は我々を追っているようだな。」

榊副長はそう言うものの、さほど気にしてはいないようだ。

「連中の動きはつかんでおるな。」

「はい。通信兵に警察のコンピュータにハッキングさせております。」

「

榊副長はさらりと言う。

「それで、情報は入ったのかい。」

「はい。ただし、今のところは安全です。」

「そうか。しかし、『まほろば』に移動を急ぐ必要があるな。」

「かしこまりました。第一波の輸送隊は今日の午前〇二〇時に出発しましたが第二波は今夜の二三〇〇時に出発する予定です。今日はだんな様のご秘蔵の品も搬出したします。」

「ああ、荷作りは終わっているよ。」

東雲艦長の骨董品の数々や大量の書物、漫画、ゲーム、アニメのDVD等は緩衝材と共に段ボール箱に収納され、いつでも運び出せるようにしてあった。

そう言うとき榊副長は席を立ち、通信室へ向かった。

「……ん……」

信はムクリと起き上がり、目をこすった。

「いつの間にか寝ちゃったか……」

時計を見ると既に4時を回っていた。

「しかし、僕は『まほろば』に乗るべきなのかな。」

信はあぐらをかいて考え始めた。

ふと、昨日もらった懐中時計型の発信機が目に入った。

「あんなことを言っただけ……僕は結構小心者だなあ……」

信は自嘲気味に言った。

することがないので信は夕食の買い物をするために近所のスーパーへと出かけていった。

「あの小僧だ。奴があ爺さんと知り合いか……」

丈の長いコートにサングラスとソフト帽の出で立ちの男は、買い物のためにアパートから出かける信を監視していた。

「気のせいかな。」

信は何者かの視線に気が付いた。今回の視線は以前に感じたものとは何か違っていた。いかにも「監視されている」と感じる視線である。

「さっさと買い物を済ませよう。」

信は早歩きでスーパーへ向かった。

信は部屋に帰るなり、手を洗って調理を始めた。本日の夕食はホワイトシチューである。

しかし、調理をする信の表情は不安のせいか優れない。料理が出来上がるとすぐに食べる仕度をした。

しかし、どうも味わえない。決してシチューの出来が悪いわけではない。それほどにも信の不安は料理を味わわせてくれないのだ。食べ終わるとすぐに食器を洗った。

洗い終わってテーブルに突っ伏していると、ドンドン！

とドアをノックする音が聞こえた。信はビクツとした。言い知れない不安に駆られながらもドアの前に立った。

「信ちゃん、郵便だよ。」

大家夫人の好恵だ。

信はホツとするとドアを開け、好恵から封筒を受け取った。

好恵は下の階に戻っていった。

「？」

信は首をかしげた。

『地球の目』

このような組織等聞いたことがなかった。少なくともこんな胡散臭い団体に知り合いなどいない。それに住所も知られてしまっており、気味悪かった。

信は封筒を開け、中の三つ折りにしたA4サイズの手紙に目を通した。

拝啓

五月十日の十七時に「桜木荘」裏の児童公園にてお待ちしております。ます。

敬具

「なんだこれ？日付けは・・・明日？」

手紙には肝心の用事が書かれておらず、日にちと場所のみが指定してあった。

用事が書かれていないだけに信は余計に不安になった。

「何か、とんでもないことに巻き込まれたのかも・・・」

信はぼつりと漏らした。

ふと、リュックサックが目に入った。

「・・・逃げる準備をしておこうかな・・・」

そう思うと信は、早速荷作りを始めた。大量の画材一式はうまくまとめてアタッシュケースに詰め込んだ。また、衣類や何冊かの本も旅行用の大きめのバッグに詰め込んだ。

「こんなもんかな・・・お？これは・・・」

昨日もらった懐中腕時計型の無線機である。机の上に置いたままであった。

「本当に『まほろば』からの迎えが来るのかな？」

そう思うと無線機を明日着る上着のポケットに仕舞った。

夜二〇〇〇時。

月明かりが照らす太平洋の房総半島沖約二〇〇海里をアメリカ合衆国海軍第八艦隊がハワイへ向けて航行していた。

旗艦・正規空母『W・ハルゼー』。

艦橋は暗く、モニターやレーダー、計器盤の明かりがあるのみであった。

「艦長、右舷の方向、距離二〇〇〇メートルに艦影が見えます。」

双眼鏡を持った航海士官は艦長に報告した。

「レーダーはどうした？」

艦長はオペレーターに聞く。

「反応がありません。ステルス艦かと思われます。」

艦長は「むう」と、納得しかねるような表情をした。

「しかし、この距離でここまで大きく見えるとなると、恐らく本艦並の大きさです。」

「馬鹿な！そんなステルス艦など聞いたことがない！」

航海士官の信じがたい報告に艦長はつい、声を荒げてしまった。とはいえ、実際に見てみないわけにはいかなかった。

艦長は自分の双眼鏡で確認してみる。

「……！……あの艦か……」

「ええ、突然見え始めました。」

半信半疑だっただけに驚きを隠せなかった。

「通信兵、船籍、艦名は問い合わせたか？」

「応答しません。平行して航行しているだけです。」

艦長は返ってきた答えに顔をしかめた。

「不気味な艦だな。かつての日本海軍のヤマト型戦艦のように見える。」

「まさか！ヤマトは九州沖に沈んだはずですよ。ムサシはもっと南のフィリピンで……」

どうも不可解だ。そもそも正規空母並の大きさのステルス艦という時点で、そのような艦が配備されているという話など聞いたことがないのだ。海域が海域なので海上自衛隊の可能性も考えてみた。しかし、今までアメリカの顔色を伺っていた日本政府のことだ。豹変するとは考えにくい。

「艦長、霧です。」

航海士官の言葉に艦橋の外を確認すると周囲には濃密な霧が立ち込めていた。

「ちっ！気象班は何をやってやがった！」

艦長は悪態をついた。

翌日、信が「巡洋艦高雄」の色付けをしていたときだった。
ドンドン！

とドアをノックする音がした。

昨日のこともあったせいがこの音は心臓に悪い。信は作業を中断し、
ドアを開けた。そこには、予想だにしない人物が立っていた。

「警察の者です。ちょっと伺いたいことがあって参りました。」

信はぎくりとした。東雲艦長のことを聞かれると思ったからだ。

「何でしょうか？」

信は平静を装いつつ対応する。

「この辺りに黒いリムジンを見かけませんでしたか？」

予想通りであった。リムジンといえば三鷹の東雲艦長の屋敷のもの
しか知らない。

「昨日のニュースは見ましたが、そんなリムジンは見かけませんよ。」

信はきつぱりと答えた。

「そうですか。失礼致しました。ご協力ありがとうございました。」

警官は一礼すると階段を下りていった。

信は「ふう」と一息つくと胸を撫で下ろした。

「ほんとに逃げたほうがよさそうだな。」

しかし、昨日の手紙の内容を思い出した。十七時にアパートの裏の
公園へ行かねばならない。

東京都紅玉島。

八丈島から二〇〇海里ほど南東に位置する、直径一〇キロメートル
ほどの円形に近い島である。

火山島であり、中央には直径四キロほどのカルデラをもつ休火山が

存在している。また、カルデラ内には中規模の湖と管制塔やヘリポート、格納庫、居住施設等の人工構造物が存在している。

居住施設内の通信室。

一等水兵櫻井翔子は通信室の備品のパソコンで情報収集の作業を行っていた。

昨夜、高速輸送ヘリで紅玉島駐留陸戦隊基地まで移動してきたばかりだが、仕事に余念がなかった。

「翔子。連中の動きはつかめた？」

長谷川潤は翔子の傍に立ちモニタを覗き込んだ。

「何とか『地球の目』の中央コンピュータにハッキングしてみたわ。現状はやばいわね。これを見てよ。」

翔子は顔をしかめた。

潤は翔子が指し示す「それ」を見て目を瞠った。

「信兄貴がマークされている！」

「そうなのよ。しかも見てよ！今日の一七〇〇時に東大金の桜木荘っていうアパートうらの公園で接触するらしいわ。」

「今は・・・一一〇〇時。後6時間か・・・」

「時間が無いわね。」

「救出にいかうぜ！艦長に許可をもらってくる！」

「私も行くわ！」

潤と翔子は東雲艦長の部屋へと向かった。

「そうか。許可する。」

東雲艦長はあっさりと許可をくれた。

「君たちの他に陸戦隊員を四人をつける。あと、すぐに高速ヘリの手配をする。横須賀支部にトラックを手配しておくよ。」

東雲艦長は必要な準備は全てやってくれるらしい。

「ありがとうございます！」

潤と翔子は礼を言った。

「くれぐれも気をつけたまえ。何かあったら『まほろば』に連絡するように。わしは、そろそろ『まほろば』に移動するからな。」

東雲艦長はまだ少年少女である二人への気遣いも忘れなかった。

「行ってまいります！」

二人は元氣良く敬礼すると退出し、出撃準備にかかった。

「有賀君、無事でいてくれ。」

一人残された東雲艦長は本土の方角の空を見上げ、若き友人を思いながらぼつりとつぶやいた。

「そろそろ約束の時間だ……」

信は時計を気にしながら、公園に行くか行くまいか迷っていた。

外を見ると西の空には夕焼け雲が広がっていた。赤、桃色、オレンジ等の色鮮やかな空は息を呑むような美しさである。しかし、今の心境ではその美しい空はおどろおどろしいものに映った。

「行こう……！」

信はついに決意した。

まとめた荷物を全て持ってアパートの裏の公園に足を運んだ。

時間は少しさかのぼる。

午後二時。

横須賀の古ぼけた倉庫前。

その付近は人の気配がなく、しんとしていた。

そこへ、突然タービンエンジンの爆音が響いた。

高速ヘリコプターの側面のスライド式の扉が開き、中から黒いセーラー服を纏い、自動小銃やライフル、予備弾丸を装備した六人の兵士が次々と降りてきた。中には潤と翔子の姿もあった。

「潤。トラックはどこかしらね。」

「多分倉庫の中だろう。」

二人は他の四人の水兵と共に倉庫の人員用のドアから倉庫に入った。中はスクラップの山が乱立していた。

「相変わらず整理されていないわね。」

「しょうがないよ。殆ど使われていないから。」

二人が会話を交わしていると、

ブルルル

というエンジン音が聞こえてきた。

潤を先頭に六人は音が聞こえるほうへと走った。

「あつた。」

潤は幌付きの軍用トラックを見つけた。

「よお！遅かったな。」

運転席から無精髭の目立つ筋肉質な体つきの男が顔を出した。海軍の下士官の制服をルーズに着崩しているその男からは気さくそうな雰囲気漂っていた。

「源田兵曹長、申し訳ありません。」

潤は謝った。

「まあ、いいさ。よし、お前ら。後ろに乗れ。」

下士官は荷台に乗るように促した。

「メンバーの確認はよろしいのですか？」

翔子が聞く。

「ああ、いいんだよ。写真付の名簿が俺んここにまわってきたんだ。六人の顔ぐらい瞬時に確認したよ。」

どうも、細かいことは気にしないさつくばらんな性格のようだ。「細けえこたぁいいんだよ」という台詞が最もしっくりくる人物であ

る。

「というわけで乗りな。」

そう言われ、六人は荷台に乗り込んだ。

「ちよつと荒つぽいからな。気をつけるよ。」

と言い終わるや否や下士官はトラックを急発進させた。

「ちよつ！公道では目立ちすぎないでくださいよ！」

潤は倒れそうになりながら言う。

「分かつてるよ。だがな、早く向こうに着いて待機するぞ。」

軍用トラックは倉庫を出ると東大金に向かって走り出した。

信は公園に着くと入り口付近の茂みに荷物を隠した。

そして、公園端のベンチのほうを見た。

そこには、黒のスーツにソフト帽とサングラスを着用した男が座っていた。男はしきりに周囲を確認しているようだった。

信は目があったように感じた。

男はベンチを立つとこちらに向かって歩いてきた。

心臓の鼓動が早い。息も苦しい。

信は命の危機すら感じていた。

その三〇分前。

潤をはじめとする六人の水兵は桜井荘裏の児童公園の茂みに分散して待機していた。

「潤、あいつ・・・！」

翔子は黒ずくめの男が公園に入ってくるのに気付いた。

「地球の目のやつか・・・。翔子、他の四人に連絡して。」

そう言う潤はスナイパーライフルを構えた。

「山桜2より山桜4へ。敵は見える？」

翔子は別のところで待機している二人のチームへ無線機で確認した。山桜2とは臨時編成された救出部隊の翔子のコールサインである。

《こちら山桜4。黒ずくめの男を確認。》

返事がきた。

そしてすぐにもう一つ箇所に待機しているチームからも通信が来た。

《こちら山桜6。敵確認。》

これで六人とも敵を捕捉したことになる。

翔子はすぐに全員が敵を捕捉したことをトラックで待機する源田兵曹長（橘1）に伝えた。

三〇分が経過した。

潤は公園の門に信がやってきたのを見つけた。

「翔子。いつでも突撃できるように。」

名を呼ばれると、翔子は他の2チームと源田兵曹長に連絡を入れた。

「有賀信君だね？」

黒ずくめの男の第一声である。

ひとまず信は「はい。」と答えた。

「ちよつと話があるだけだ。すぐに終わるよ。」

男は表情を変えないので気味が悪かった。

「・・・ご用件は？」

信は身構えながら聞き返す。

「単刀直入だね。では、本題に入る。この付近で黒いリムジンを見なかったかな？」

男が聞いてきた。

信は「やはり」と思った。

「知りません。」

反射的にそう答えた。

「それは失礼。では、最近、戦艦大和にそっくりな戦艦が現れたという話題が盛り上がっているが、ご存知か。」

信は「まほろば」のことだと、すぐに分かった。それで同時に、どうして「まほろば」のことを知りたがるんだ？と疑問に思った。

「ニュースは見ていましたか。」

ひとまず当たり障りのないことを答えておく。

「我々は、かつての日本海軍の真実を探求する団体でね。今回の話題はどうも見過ごせてなくてね。」

男はそう言うものの、信はもっと胡散臭いものを感じた。

「でも、根拠もないホラ話かもしれないよ。」

信はなんとか会話を終わらせようとしてみる。
しかし、

「我々も始めはそう思ったよ。しかし、話があまりにも具体的すぎるのでね。調査に乗り出すことになったのだ。」

男はあくまで信を誘導尋問しようとしている。

「そこで、ミリタリー雑誌にイラストを寄稿し詳しい軍事知識を持つ君に協力を頼みたい。」

そう言う男は信の腕をつかんだ。

信は拒絶反応を起こすように手を振りほどこうとした。

そのとき、鋭く輝く物体が黒ずくめの男の左肩に命中した。

「ぐああっ！」

肩から鮮血が飛び散り、男は崩れ落ちるようにしゃがみ込んだ。

その直後、茂みのうちの三箇所それぞれから二人ずつ、合計六人の武装したセーラー服姿の兵士が姿を現した。

「何だ？貴様ら……！」

言い切る前に男は二人の水兵に取り押さえられた。

信は突然の出来事に驚愕の表情のまま動けなかった。

「信兄貴！早く逃げよう！」

そう言う信の手を握った水兵は見覚えのある顔だった。

「潤君！」

信は更に驚いた。潤が助けに来ると思わなかったのだ。

「長谷川先輩！その人の荷物は無事です！」

背の低い少年水兵は信が茂みに隠した荷物を見つけた。

「トラックに積んでくれ！」

潤は指示を下した。

ちょうど公園の入り口の前に源田兵曹長のトラックがやってきた。

「信兄貴！早くトラックに！」

潤は信にトラックの後ろに乗るように促した。

「分かった！」

信は荷台に飛び乗った。

「もう、その男には用はない！撤収するぞ！」

潤は他の水兵に呼びかけた。

自分を含めて六人全員と信が乗り込んだのを確認すると源田兵曹長に合図を送った。

（荷台とキャビンの間の仕切りに小さなドアがあるため、両者の間を行き来できる。）

「しっかりつかまってるよ！」

源田兵曹長はそう言うトラックを急発進させた。

周りでは買い物帰りの主婦や帰宅中のサラリーマンが目を見くろして驚いているが、源田は気にしてはいられなかった。

「信兄貴、大丈夫？」

潤は腰が抜けかけている信に声をかけた。

「ああ・・・うん。」

今一状況がつかめないながらも信は肯いた。

「良かったあ。信さんが無事です。」

翔子だ。安心したかのような笑みを浮かべていた。

「翔子ちゃん！」

信にはいつの間にか笑顔が戻っていた。

「潤君も翔子ちゃんも、わざわざありがとう。」

信はぺこりと頭を下げた。

「ええと、信さんですよ。」

荷物をトラックに運んでくれた小柄な少年水兵が遠慮がちに聞いてきた。

「お荷物、お返ししますね。」

小柄な水兵はアタツシケースとバッグを信に渡した。

「ありがとう。助かったよ。」

信は安心したような表情で礼を言った。

「いいえ。任務ですから。申し送れましたが、自分は二等水兵・神崎雄太と申します。よろしくお願いします。」

雄太と名乗る色白の小柄な水兵は元気いっぱい挨拶をした。

「うん。よろしくね。」

信も笑顔で返す。

雄太に続いて他の三人も挨拶してきた。

「私は二等水兵・秋山春花です。よろしく。」

勝気な雰囲気な少女で短めのツインテールの髪をしている。その明るい笑顔と相まって活発な印象を受けた。

「自分は一等水兵・大野拓真です。よろしくお願いします。」

深々とお辞儀をしたその水兵は荷台に乗っている七人の中では一番背が高く、筋肉質だ。短めの髪型で清潔感が漂っている。威圧的な印象以上に眼の細い温厚な顔つきが見る者を和ませてくれるような印象だ。

「自分は二等水兵・田島康夫といいます。まあまあ、信兄貴もそう固くならないでリラックスしましょうよ。」

どうやらお調子者かつひょうきん者のようだ。ニカツと笑うその笑顔はまさに「いたずら小僧」のそれだ。

夕日の沈む街を、トラックは横須賀へ向かって走る。

ちょうど隅田川の川沿いの道を走っていた。

雄太はしきりに後方を警戒していた。

「潤先輩、あれ！」

雄太は黒いベンツが数台、こちらに向かってくるのを見つけた。

「！・・・あの男、援軍を呼びやがったな！」

潤は、ベンツを敵だと認識するのに2秒もかからなかった。

「兵曹長！追っ手です！」

翔子は直ちに報告した。

「数でごり押ししようたって、無駄なんだよ。」

源田兵曹長はバックミラーで確認しながら言った。

「どうしますか？」

拓真は指示を仰ぐ。

「まあ、慌てんな。ひとまず振り切るぞ。しっかりつかまってるよ！」

源田兵曹長は言い終わるとハンドルを急激に切った。

トラックはガードレールを突き破り、土手を下る。河原まで降りて、

源田兵曹長はアクセルを踏み込んだ。

「どうだ！」

源田は確認する。

「駄目です！」

翔子からの返事が来た。

敵はしつこく追いつがってきた。

ベンツの側面の窓が開き、拳銃を持った男が顔を出した。

「やむを得ん。発砲を許可する！向こうも撃つてきやがるから気をつける！」

源田は命令を下した。

「了解！」

六人の水兵はすかさず銃火器を手にとった。

潤と雄太はスナイパーライフルを、春花と翔子は軽機関銃、康夫は十二・七ミリ重機関銃を、拓真はトラックに装備されている対戦車ライフルを後方に構え、ベンツの群れに向かって容赦なく攻撃を加

えた。

河原には銃声が飛び交う。

「食らえ！」

康夫は追いつがるベントツに十二・七ミリ弾丸をお見舞いした。弾丸はベントツのエンジンルームにヒットし、車体を炎上させた。

「観念しなさい！」

「ヤクザのくせに近寄らないで！」

翔子と春花も容赦なく軽機関銃で弾丸を浴びせる。三台のベントツは無数の穴が開き、蜂の巣のようになった。しまいにはタイヤを撃ちぬかれ、群れから脱落していった。

潤はスナイパーライフルでタイヤを正確に狙撃していた。

既に一〇台以上のベントツを阻止したが何処からとなく何台も湧いて来た。

「くそつ！きりがない。」

拓真が悪態をついた。

「兵曹長！」

春花は指示を仰いだ。

「今回は予想外だぜ。数が多すぎる。敵さんもこんな大掛かりな作戦を実行するとはただけ暇なんだよ！」

源田兵曹長は、ふざけているのか焦っているのか分からないような悪態をついた。

信は「だめか」と思った。同時に、他のみんなは戦っているのに自分は何もできない無力な存在だと思った。

そのとき、上着のポケットに覚えのある感触を感じた。

「これは！」

すかさずポケットの中身を取り出す。

懐中時計型の無線機だった。

「みんな、これで援軍を呼べる？」

信は六人に聞いた。

「呼べるよ。これで迎えが来る。早く押して！」

潤はせかすように言った。

「分かった。」

信は、カバーを開けた。黒い基盤の上に金色の数字と針が輝く時計は6時を過ぎていた。

12の数字の上に桜の形をした金色のキーがあつた。

信は、キーに指を触れ、やや力を入れてしっかりと押した。

「何も起こらない・・・」

と言った次の瞬間、時計の針の動きが止まった。

一瞬静寂に包まれたような感覚を覚えた。

更に次の瞬間、周囲に閃光がひらめいた。

「何？今のは！」

信は何が起こったのか分からず、一瞬の不可解な現象に驚いていた。

「来た！」

潤は嬉しそうにしていた。

信はわけがわからなかった。

その直後、突然空に轟音が轟いた。

信は、何事かと思い幌から顔を出し、空を見上げた。

「あれが迎え？」

轟音の主はヘリコプターであつた。しかも相当大きい。四つの大型のローターを装備したその大型ヘリは自衛隊のものでも米軍のものでもない、見たことがない型のものであつた。

「そう！あれが私達の軍の最新鋭の輸送ヘリよ。」

翔子は少し自慢げに言う。

大型ヘリは輸送機でありながら、三〇ミリ機関砲や武装ポッドを装備していた。

ベンツの群れは突然の大型ヘリの出現に驚いて急停止した。

大型ヘリはホバリングしながら三〇ミリバルカン砲の照準をベンツの群れに定め、すかさず2秒ほど連射した

その威力は絶大だ。わずか2秒の連射で数台のベンツが瞬時に木っ端微塵になつた。

強大な威力の前に敵は恐れをなし、数多く生き残ったベントツの者達も完全に戦意を喪失し、退却を始めた。

大型ヘリは河原に降り、後部の貨物キャビンの扉を開いた。天井には機内灯が灯されており、中は非常に広いことが分かった。

「よっしゃ！ 乗り込むぞ。」

源田兵曹長は徐行しながらトラックごと貨物キャビンに乗り込んだ。内部に待機していた水兵によってトラックが固定されると扉はすぐに閉められ、ヘリは離陸した。

「荷台から降りても大丈夫よ。」

何とか助かって安堵していた信は翔子に声をかけられた。

気が付くと水兵たちも源田兵曹長もトラックから降りていた。

「あ。うん。」

信は、トラックを降りると貨物キャビンの側面に開いている丸窓から外を覗いた。

ライトアップした東京の街並が小さくなっていくのが見えた。

「しょうがないな。大家さんに連絡しておくか。」

ぼつりとつぶやくと、ポケットから携帯電話を取り出し、メールを書き始めた。

《編集部から緊急招集がかかりました。取材の仕事です。とにかく長い取材になるため、当分帰れそうにありません。時間が無いので出発後の報告となりました。》

書き終わると、すぐに送信した。

しばらくすると大家の忠治と好恵の夫妻から返信が来た。

信は迷惑をかけてしまったかと思いつつ、メールボックスを開いた。《この不景気の中だから仕方がないこととは言え、お疲れ様。長いお仕事で辛いことがあるかもしれませんが頑張ってください。ただし、無理をしないように。くれぐれも体に気をつけて。（忠治・好恵）》

そこには励ましと気遣いの言葉があった。ほぼ嘘に近い内容のメールを送ってしまっただけに信は少し後悔していた。

そして、

《ありがとうございます。お二人こそ、お体にお気をつけて。》
と簡単なメールを作成し、送信した。

その後しばらく、信は感傷に浸っていた。

【第三章・若者の決断】（後書き）

信は胡散臭い組織に嗅ぎつけられていたようです。しかし、源田兵曹長率いる陸戦隊が助けてくれました。水兵さんたちが少年少女ばかりなのは言うまでも無く私の趣味です。次回でついに戦艦まほろばに乗り込みます。

【第四章・まほろばの少女】（前書き）

信たちを乗せた大型ヘリは八丈島から200海里ほど離れた紅玉島という火山島に到着した。その島の地下には岩盤をくりぬいたドッグがあり、そこに「戦艦まほろば」の姿があった。ついに信は艦内で夢に現れた少女と出会う。

【第四章・まほろばの少女】

【第四章・まほろばの少女】

「信お兄さん、到着まで時間がかかりますから一緒にご飯にしませんか？」

雄太が夕食に誘ってきた。

「あ、そうだね。そろそろおなかが空いてきたよ。」

信は腹に手を当てながら言う。

源田兵曹長や潤たちは幌を外したトラックに適当に腰かけて加熱パックで調理したレトルトの海軍カレーを食べていた。

「信殿もどうぞ。」

拓真は白米飯とカレーを盛ったアルマイトの皿とスプーンを信に渡してくれた。

「ありがとう。」

信は笑顔で受け取った。

受け取ると、早速ありつくことにした。

「ん・・・美味しい。」

やはり海軍カレーは他のレトルトとは違う。

「ちなみに、このカレーは『まほろば味』でござい。これがパッケージっす。市販品ではありません。」

康夫が紹介する。パッケージには一五門の主砲を振りかざした大和型によく似た戦艦が描かれていた。

皆で食事をしながら世間話や趣味の話、猥談等をしてしばらく談笑した。

「もうすぐ紅玉島です。」

一人の水兵が貨物キャビンに入ってきて源田兵曹長に報告した。

「よし、みんな。降りる準備をしろ。」

源田は潤たちに伝えた。

信は窓の外を見た。

月明かりに輝く海面に大きな黒い影が浮かんでいるのが見えた。

「あれは、湖？」

信は、カルデラの中にある湖の存在に気が付いた。

「そうだ。近くに建物の明かりが見えるだろう？あれが紅玉島鎮守府の建物だ。あの近くにヘリポートがある。」

源田兵曹長が指を指しながら説明してくれた。

ヘリコプターはカルデラ火口原のヘリポートに着陸した。

「よし、皆乗れ。ドッグまで行くぞ。」

源田兵曹長は潤たちをトラックに乗せるとすぐにエンジンをかけ、走り出した。

トラックは森に向かって進んでいく。

紅玉島の森の木は相当大きく、森そのものの密度も高い。

トラックは森の中の道を奥へ奥へと進んでいった。森の中は相当暗く、ライトが照らす範囲以外はまるで見えない。

トラックはしばらく変化の無い風景の中の舗装されていない道を走った。

「ここだ。」

源田兵曹長はトラックを一旦停めた。

信はライトの照らす先を見た。

そこには洞窟の入り口があった。カルデラの外輪山の内壁の一部の切り立った斜面に大きな穴があいているのだ。おそらく溶岩が通過した跡なのだろう。切り立った斜面は森と密接しており、上空からは洞窟の位置が分からないようになっていた。

「よし、皆。入るぞ。」

源田兵曹長はトラックを洞窟の中に進めた。

洞窟の中は以外に広く、長い。通過した溶岩はかなりの量である

ことが見て取れた。

しばらく走ると人工的な構造物の前に到着した。大きな鉄の扉がある建物で、洞窟の天井から下までの高さがある。

源田兵曹長はトラックを降りると扉のすぐ傍にあるコンソールの前に立った。キーボードで素早く認識番号、コールサイン、パスワードを入力した。正常に認識されたことを確認すると液晶画面上に表示されたボタンをクリックした。そして、二秒ほど待つと、扉は駆動音を立てながら開いた。

源田兵曹長はすぐに運転席に戻り、トラックを中に進め入れた。

「潤君、これは何？」

信は質問する。

「エレベーターだよ。」

潤は答えた。

ドアが閉まるとエレベーターは降下を開始した。スピードは相当速い。

「ずいぶんと降下したね？」

信は少し不安げな表情をした。

「もうすぐつよ。」

康夫は信の不安を察したのか、笑顔で答えた。

ズスン！ と音を立ててエレベーターは停止した。これほど大掛かりなエレベーターであるのにも関わらず、衝撃はほとんど感じなかった。

エレベーターの扉が開き始めた。エレベーターの外の光が差し込み、信は眩しさに一瞬目を瞑った。

やがて光に慣れ、目を開いた。

信は幌から顔を出すと、トラックの周囲には多数のコンテナや荷物が積み重ねてあり、クレーンやトレーラーも見えた。

「あっ！」

と信はつい驚きの声を上げてしまった。

そこにはまぎれもない巨大戦艦がその巨体を休めていたのだ。

長大かつ広大ながらも見事な曲線によって縁取られた美しい船体。

威圧的な鋼の輝きを放つ一五門の巨大な主砲。

複雑怪奇なシルエットを描く対空兵装群。

摩天楼のごとくそびえる艦橋や煙突。

天を突くようにそびえるマスト。

これ等の要素が美しく荘厳な、神々しいフォルムを描き出していた。

「戦艦まほろば！」

信はその名を叫んだ。

「そうだ。よく知ってるじゃないか。これがお前さんをここに呼んだ『運命』ってわけさ。」

と源田兵曹長は言う。

「そういうわけで艦に入るぞ。」

トラックはドッグに鎮座する鋼の城に向かっていった。

トラックは内火艇搬入口から艦内の格納庫へ入った。トラックが停止し、エンジンを切ると整備兵達が他の内火艇や艦載機と同様に固定する作業を始めた。

「有賀。櫻井。艦橋にて艦長がお待ちだ。」

源田兵曹長の呼びかけに、進と翔子は後に続いた。

信は源田兵曹長の後に続き、「まほろば」の通路を歩いていた。

「大東亜戦争中の軍艦の中って、こうなっていたんだ。」

しかも本艦は戦艦である。艦そのものが相当広く、内部は非常に複雑に仕切られている。

「迷子になりそう・・・」

信は不安を感じ、消え入りそうな声で言った。

「大丈夫だよ！一週間あれば覚えるさ。俺なんか配属されたばかりの時は初めて乗って二〇分くらいで迷子になったさ。んで間違っ

艦長室の前を通つちまつて上官にどやされたな。まあ、艦長は笑つて許してくれたんだが。あと、機関室では機関士連中とボコリ合うはめになつちまったよ。」

「私は途中までは分かっていたつもりで歩いていただけ、いつの間にか分からなくなつたわね。それで、そのまま3時間ぐらい彷徨つていたり・・・」

一応、源田兵曹長と翔子は信を励ましているつもりなのだろうが、失敗談や武勇伝(?)はとうてい励ましになるものではない。

しばらく歩くと他よりも頑丈そうな扉の前にたどり着いた。源田兵曹長が懷から取り出したカードでリーダに読み込ませると、扉が開いた。中に入ると、先ほどの第二次世界大戦中の軍艦の内装とは異なる近未来的な内装に変化していた。

「これは！」

信は驚いた。

「重防御区画よ。」

翔子が言った。

「ああ。この艦は何度が改造を受けているんだ。特に軍艦の機能として重要な部分は優先的に改造される。その次に居住区だな。だがな、他の区画は昔のままの部分が多いのさ。」

源田兵曹長が説明してくれた。

信は源田兵曹長の説明を神妙な顔で聞いていた。

「よし。このエレベーターを上がっていけば艦橋に着く。」

ついに終点だ。信は源田兵曹長と翔子の後に続いてエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターは静かに昇り始めた。

信は艦橋に上れると、内心期待に胸を弾ませていた。
「着いたぞ。」

エレベーターは停止し、扉が開いた。

三人はエレベーターから出た。

「これは！」

信は驚嘆の声を上げた。

雑誌の特集で見た戦艦大和の3DCGで描かれた艦橋とはまるで違う。「まほろば」の艦橋は二層吹き抜けの構造になっており、士官、下士官、水兵と幅広い階級層のオペレーターが各自の席に座り、目の前に浮かび上がるモニターに目をやりコンソールを操作している。いずれも見たことのない最新鋭の機材のようだ。

「本艦の第二艦橋だ。よく来たね。有賀君。」

一番高い位置にある艦長席から声がした。

信はその声に振り向くと、純白の軍服を纏った精悍な老人が艦長席から降りてきた。

「おじいさん！　いいえ、艦長！」

信は嬉しそうに東雲艦長を呼んだ。

東雲艦長も信をにこやかに迎えてくれた。

「無事でよかったよ。」

そう言うのと、信の肩に優しく手を置いた。

「今日はもう遅いな。有賀君もお疲れだろう。翔子君、部屋に案内してあげなさい。」

信は翔子の後について艦橋を出た。

「ここが信さんの部屋。中の備品は遠慮しないで使っていいわ。」

翔子は信を兵員室まで案内してくれた。

「昔よりも自動化が進んでいるから一人一部屋になっているの。まあ、士官の個室よりは狭いけどね。」

翔子が案内してくれた兵員室は机、パソコン、電気スタンド、棚、筆筒、ベッド、ベッドの上にセーラー服の上下と帽子、洗面台、鏡等と生活に必要な家具がほぼ揃っており、大東亜戦争中の軍艦とは段違いの快適さが見て取れた。

「ありがとう。それにしても今日は疲れたなあ。」

信は肩や首をボキボキ鳴らしながら言った。

「今日はもう寝たほうがいいですよ。明日出航ですから。朝ご飯の時は呼びに来ますから、ラッパが鳴ったら起きてベッドを整理して着替えてください。」

「そう。分かった。それじゃあ、お休み。今日は本当にありがとう。」

「はい。お休みなさい。」

翔子と別れると信はすぐにベッドに入り、電気を消した。今日はあんな（・・・）ことがあったためか、思っていたより疲れていたようだ。

一気に睡魔が襲って来、信はすぐに眠りに落ちた。

「・・・ん・・・」

「し・・・ん」

「信・・・」

「信。来てくれて、うれしい・・・。」

囁く声に信は目を覚ました。

目を開けると、そこには仄かに白い光を放つ少女が立っていた。

白い水干を纏い、透き通るような白い肌の幼くあどけないながらも整った端正かつ愛らしい顔立ちに腰の辺りまで伸びた艶やかな黒髪の少女。そう、信の夢に現れた少女だ。

信は驚きつつも聴いてみた。

「君は・・・誰？ どうして僕を知ってるの？」

すると少女は一瞬悲しそうな表情になったように見えたが、すぐに愛らしい微笑みに変わった。

「私はまほろば。戦艦まほろばの艦魂。」

少女は優しい口調ではっきりと自分の名を告げた。

「艦魂？」

信はその言葉の意味を知っていた。

「艦魂」とは文字通り艦に宿る魂である。それは若い女性や少女の姿をしているといわれており、古来より、洋の東西を問わず船乗り達の間で伝えられてきた。日本も例外ではなく八百万の神の一柱として信仰されてきた。

「君が、まほろばの・・・艦魂・・・」

まほろばと名乗る少女は愛らしい笑顔で「うん」と頷くと信の傍に寄ってきた。

「よろしくね。信。」

まほろばは握手を求め、小さな手を差し出した。

「僕のほうこそ、よろしく。」

信の手はまほろばの白い肌の小さな柔らかな手を包んだ。

【第四章・まほろばの少女】（後書き）

更新を怠り誠に申し訳ございません。

戒めにニコニコ動画の「ハートマン軍曹シリーズ」を見ようと思います。

ついに、メインヒロインの登場でございます。まほろばちゃんが水干を着ているのは私が公家文化趣味であり装束フェチであるからですw。

【第五章・戦艦まほろば出撃・前編】（前書き）

ついに戦艦まほろばは出撃します。

まずは朝食。兵隊は飯がないと動きません。

【第五章・戦艦まほろば出撃・前編】

【第五章・戦艦まほろば出撃・前編】

朝の〇五〇〇時。

戦艦まほろばの艦内にラッパの音色が響き渡った。信はすぐにベツドから出て支給されたセーラー服に着替え、顔を洗い、翔子が呼びに来るまで周囲の整理をした。

「信さん。おはようございます。朝御飯の時間なので食堂に案内しますよ。」

翔子がやってきた。

「おはよう。結構早いだね。」

「はい。今日出航ですから朝ごはんはいつもより早めなんです。」
そう言うつと翔子は信の手を引き食堂へ向かって歩き出した。

食堂には大勢の乗組員がこつた返していた。大多数は水兵で青年と少年少女が多く、その中に下士官がチラホラ見られる。中には士官もあり、周囲の水兵と談笑している。気さくな士官なのだろう。

「よう！お早う。有賀ア。」

聞き覚えのある声に振り向けば、そこには源田兵曹長が座っていた。

「お早うございます。」

翔子は敬礼する。

信も翔子に続いてする。

「まあ、座れよ。」

源田兵曹長は手招きして向かいに座ることを促した。

「お早う。信兄貴。」

潤、雄太、春花、拓真、康夫もやってきた。

テーブルには烹炊兵の手で料理が運ばれてきた。本日のメニュー

は主食の白米飯をはじめ、玉ねぎとわかめの味噌汁、いり卵、ベーコン、コーンサラダ（レタス、人参入り）、牛乳１パックである。「いい食事ですね。アパートにいたときよりバランスがいいかも。」信は率直な感想を述べた。

「旧日本海軍時代から軍艦の食事は栄養のバランスには気を遣っていたんだぜ。」

源田兵曹長の言うとおり、かつての日本海軍ではバランスのとれた食事が出された。肉や魚もほぼ毎日出るので、陸軍の兵士達は驚いたほどだ。

そして『まほろば』も例外ではなく、現に目の前に並んでいる食事はバランスの取れたものであった。

「いただきます」を済ませると信は皆と『まほろば味』の朝食を味わった。

朝食を済ませると信は、翔子、雄太、潤と共に艦橋へ向かった。

艦橋に着くと、既に士官第二種軍装姿の榊副長がいた。

艦橋要員と挨拶を済ませると、ほどなくして東雲艦長がやってきた。

信、潤、翔子は敬礼し、艦長とも挨拶を済ませた。

艦長は返礼し、柔和な笑みを浮かべた。

「いよいよ出航だ。よろしく頼むよ。」

そう言々と艦長席に座った。

翔子と雄太も持ち場に着いた。二人は艦橋勤務の電探要員である。潤はここより更に上の、射撃指揮所のある第一艦橋へ上がった。

「艦長、全員が朝食を終えました。」

榊副長が報告する。

それを聞くと東雲艦長は艦長席のマイクを手取る。

「本艦は〇八〇〇時に出航する。それまでに各員配置に付け。繰り返す。本艦は〇八〇〇時に出航する。それまでに各員配置に付け。」

艦内放送によって全乗組員に命令が通達された。

ほどなくして、まだ来ていなかった艦橋要員もやってきた。すかさず配置に付くと担当する機械の操作を始めた。

「艦長。各員配置に付きました。」

再び副長から報告があった。

「各部、状況を報告せよ。」

艦長は再び艦内放送を入れた。

「こちら機関室、異常なし。宇宙エネルギー圧縮炉心臨界突破！」

「射撃管制システム、全主砲、全火器異常なし。」

「航海科、問題なし。」

「搭載物資、確認完了。問題なし。」

「内務科、問題なし。」

艦橋には各部署からの報告が次々と入ってきた。

「艦長。全部署異常ありません。」

榊副長は艦長に最終報告をした。

東雲艦長は最終報告聞くや否や直ちに命令を下した。

「うむ。ドッグ内に注水！」

「ドッグ注水！」

榊副長は復唱する。

ドッグは艦内からの遠隔操作により注水が始まった。水位が深さ十メートルを越えてしばらくすると、ゆっくりと艦が浮かび始めた。艦が浮かんだことを確認すると、艦長は再び新たな命令を下した。

「ゲート解放！」

まほろばの前方にあるドッグの二重の扉が重厚な音を立てて開き始めた。ドッグ内には外の眩い光が差し込んできた。

扉が完全に開くと、艦長はまた新たな命令を下した。

「両舷微速！ウォータージェット始動！」

艦はゆっくりと前進しはじめた。ドッグの外へ出ると見事な快晴の空とサファイアのような海が広がっていた。

「一号電探、2号電探、探知開始！」

まほろばが沖合いに出ると翔子は電探を起動した。

「半径二百キロメートル以内に船影無し。本艦の進路上五百メートル以内に船影無し。」

翔子は報告する。

「よし。本艦は小笠原へ向かう。」

艦長の命令を受けて、操舵手は小笠原へ向けて舵輪を切った。

まほろばは荒波を切りながら太平洋を進む。

東京都新宿。

午前九時に喫茶店「オータムリーブス」は開店した。本日は水曜日だが学校が創立記念日で休みのため、馨と香織も店を手伝っていた。

ほどなくしてカランカランという小さな鐘の音と共にドアが開いた。来客だ。マスターの石山頼三をはじめ、静流、馨、香織は笑顔で迎えようとしたが、その客を見て笑顔を引つ込めた。馨と香織は身を寄せあいながら厨房の陰に隠れた。頼三と静流は不機嫌そうな顔に変わった。

「だんな、ちつと悪いんだが、この店に元軍人らしい爺さんは来ないかい？」

「言っておくが、嘘をつくとあんたの家族の命まで危ないぜ。」

スカーフエイスの目つきの悪いハゲ頭の中年とサングラスをかけた金髪のパンチパーマの男だ。頼三の最も嫌いなタイプの人間の一種である。

「その爺さんの何が知りたいんです？」

頼三は大儀そうに口を開いた。

「教えられねえな。企業秘密ってやつだ。」

ハゲ頭の男は口元を吊り上げながら言った。

「ああ、そうですかい。それじゃあ人にものを聞くって態度じゃない奴には教えられませんか。帰ってください。他のお客様の迷惑になりますし、営業妨害もお断りですよ。」

そう言つと頼三はガラスの悪いオヤジ二人をシッシツと帰るように促した。

「てめえ、ナメとんのか！ゴラ。」

「殺されてえのか！ああん？って、うわあ！」

案の定逆切れした。その直後、二人は静流に沸かしていた熱湯を浴びせられた。そして床に倒れこんだところに頼三が投げた包丁が降つてきて、顔面から紙一重のところで刺さつた。

「ひっ！て、てめえ！なめやがつて、ぐわっ！」

金髪の男が反撃しようとして銃を取つたら、今度は香織にフライパンで殴られ、髻に椅子で殴られたのだ。さらに唐辛子を顔面に塗りつけられた。

「覚えてやがれ！」

二人は辛くも店から脱出し、ベタな捨て台詞を吐いた。

「ああ、営業妨害されたんだから後で賠償をガツツリいただくぜ。」

頼三はガハハと白い歯を見せて笑つた。

「んじゃ、あばよ！」

そう言つと頼三は二人に金玉蹴りを食らわせて店から追い出した。周囲で見ていた野次馬からは盛大な拍手が沸き起こつた。

「よし！それでは皆さん。本日はヤクザ撃退記念に二割引とし、新作メニューもこれを機会に公開し販売いたします！家内が腕によりをかけて作つた新作ケーキもお楽しみに！」

頼三はスカツとした勢いで本日の特売日としてしまった。尚、新作メニューは大好評で、従来の一日の売り上げの平均の9倍超を記録した。

しかし、内心では東雲老人に相談して何かしらの防衛策を練っておきたいとも考えた。

*
*
*
*
*
*
*
*

【第五章・戦艦まほろば出撃・前編】（後書き）

戦艦まほろばは信が来るまでは改装作業と最新設備の運用試験も兼ねたテスト航海をやっていました。

【第五章・戦艦まほろば出撃・後編】（前書き）

信は艦長に戦艦まほろばの艦内を案内してもらった。艦内の設備は非常に充実しており、最新のテクノロジーが惜しげなく使われていた。

そして、源田兵曹長がとっておきのサプライズを企画していた！

【第五章・戦艦まほろば出撃・後編】

太平洋を鋼の城が小笠原諸島に向かって進んでいた。戦艦『まほろば』である。

艦橋では東雲艦長が航海士と交代して艦橋に装備された舵輪を握っていた。

「翔子君。本艦の周囲の状況を報告せよ。」

「半径二〇〇キロメートル以内に船影ありません。尚上空一〇〇〇メートルに旅客機1機確認。」

周囲の警戒はこまめに行っていた。

「ソナー員。海中の様子は？」

「異常ありません。」

艦長の問いに答えたのはソナー員の緑川幸男水兵長だ。潤や翔子より五つ年上の二十二歳で、本艦の水兵の中では最年長クラスに該当する。

「一一〇〇時から一三〇〇時にかけて昼食とする。各部署につき半々で交代せよ。」

艦長は全艦に通達した。

やがて時計が午前十一時を指と同時に艦内に儀仗兵によるラッパが鳴り響いた。昼食の合図である。

「艦長、お先にどうぞ。」

榊副長が言った。

「すまんね、榊君。さあ有賀君、翔子君、食堂に行こうか。」

翔子は一一〇〇時までは雄太に任せることにして信と共に艦長の後に続いた。

昼食は食堂に装備されている食券販売機で食券を購入し、好きな料理を選ぶことが出来るシステムである。社員食堂や学生食堂でよ

く見られる形式であらう。
本日のメニューは次の通りである。

- ・ ハンバーグ定食
- ・ メンチカツ定食
- ・ サーモンフライ定食
- ・ ラーメン（醤油、味噌、塩があり、トッピングとして半熟卵、チャーシュー、メンマ、コーン、野菜炒め）
- ・ カツ丼（卵とじ、ソース）
- ・ 牛丼
- ・ そば（トッピングとしてかき揚げ、かまぼこ、鴨肉）
- ・ けつねうどん
- ・ カレーうどん、
- ・ カレーライス（辛口、中辛、甘口）
- ・ チャーハン＆中華スープ
- ・ ドリンク（オレンジ、リンゴ、桃、ブドウ、ウーロン茶、緑茶）

もとが巨大な上に大幅な近代改造が施されているだけあって食糧事情も良く、メニューもなかなか豊富だ。

「艦長、士官食堂はないんですか？」

信は今朝も感じた疑問を聞いてみた。

すると艦長はニッと笑ってこう言った。

「昔のまほろばにはあったがね。しかし今はここだけだよ。現在のまほろばの方針として、階級を問わずに乗組員は家族であり、喜びも悲しみも共に分かち合うものであるとしている。だから食事も階級を問わずに皆で楽しむものなのだよ。」

信はそれを神妙な顔で聞いた。

「まあ、好きな料理を食べるといいよ。」

艦長はそう言うのと信と翔子を食券販売機へと促した。

午後。

信は艦長にまほろばの艦内を案内してもらっていた。

まほろばの艦内は思っていたよりも広く、複雑だった。部屋と通路が至る所にあり、全て回りきるのも大変だ。しかし、乗組員はこの複雑な艦内を把握しているのだ。

艦長はまた一つの扉を開け、信を招き入れた。

「ここは娯楽室だよ。」

信は中に入るとつい顔がほころんだ。

娯楽室は、広い部屋を数個に仕切った造りになっており、ある一角にはビリヤードや卓球台が置かれている。また別のところには防音室があり、中にはアンプライトピアノやドラムセット、スピーカ、アンプが置かれ、スタジオとなっている。

「戦艦の中にこんな施設があるなんて。」

「長い航海の中では皆ストレスが溜まってしまっからね。人間は遊べる時は遊んでおいたほうが良いのだよ。現在のまほろばは乗組員のメンタル面のことも考えた造りになっているのだよ。」

信が驚いていると艦長は笑顔で解説してくれた。

他にも、乗組員が利用する施設は沢山あった。

酒保。これは艦内のコンビニに該当するものでインスタント食品や菓子、飲料、日用品、雑誌等を販売している。すなわち、艦載機で「ちよつとコンビニ行って来る。」と言い残して飛び立つ必要もないのである。

図書館。百科事典や各種辞書、各種工学や化学の便覧及び論文、歴史関連の資料、各種文学は言うまでもなくライトノベル、漫画、ゲーム、ビデオ、CD、DVDの貸し出しも行っていた。

トレーニングルーム。ルームランナー、トレーニングバイク、ダンベルをはじめとする体操機器が多数揃っており、シャワールームも完備している。

バー。主に経営時間は夜であり、戦艦の中であるのに関わらず店構えは洒落ており、薄暗い暖色系の照明と普段流している音楽が落ち着いた雰囲気醸し出す。酒ばかりでなく簡単な食事を摂ることができる。一角には簡易ステージがあり、娯楽室と同様にピアノとドラムセットが設置されており、生演奏を聴かせることもある。

「さて、次は本艦の運用や戦闘に関係する部署を案内するよ。」

二人は甲板に出た。十八ノットで航行しているため、それなりの強い風が吹いており、信は水兵帽が飛ばされそうになったりセーラー服の襟がめくれ上がったたりした。

艦長が案内してくれた所は一番砲塔であった。

「これが本艦の主砲・四十七口径五十一センチ荷電粒子砲だ。」

東雲艦長は巨大な鋼の砲身を見上げながら言った。

二十三メートルと九七〇ミリ、つまり五十一センチメートルの四十七倍の長さの砲身である。

「五十一センチ？大和の四十六センチ砲よりも大きいんですね！」

信はまほろばの主砲の巨大さに圧倒され、威力を想像するだけで巨砲の威圧感は更に増し、恐怖すら感じた。

「さあ、次のところに行こう。」

声をかけられると信は再び艦長に続いた。

「ここが第一艦橋の射撃指揮所だよ。」

次に案内された場所は翔子や雄太が勤務していた第二艦橋の更の上に位置する艦橋で、最新の照準システムや観測システムが充実していた。

中央にある照準器のスコップを覗き、微調整をしながら体格の良い士官と打ち合わせをしているのは潤だ。

「やあ、砲術長。最新の照準器の調子はどうかね？」

艦長は体格の良い士官に声をかけた。この士官は砲術長らしい。肩には少佐の階級章が見える。

「へい！すこぶる快調でさあ。あと、コイツは若いのにいい腕してやがるんですぜ。」

少佐は潤を肘で小突きながら言った。

「ときに艦長。その少年が例の有賀君ですかい？」

「初めまして。有賀信と申します。」

信は少佐に向かって、ぎこちないながら海軍式の敬礼をした。

「俺は砲術長で少佐の源修^{みなもと}だ。よろしくな。」

砲術長はいかにも潮っ氣たっぷりの海の男らしく元氣良く返礼した。

「おっ！信兄貴。お疲れッす。」

区切りの良いところまで終わったのか潤は信に声をかけてきた。

「すごいなあ。潤君。こんな射撃管制装置を扱えるんだ。」

信は、砲術科勤務として真面目に働く潤に心底感心していた。

「いやいや。結構苦労して覚えたんですよ。今でも砲術長にどやされるし。」

「おいっ！」

潤は謙遜している風でもなく、自分の仕事能力を鼻にかけることもしなかった。しかし、砲術長は最後の余計な一言に軽く突っ込みを入れた。

信は和気藹々とした雰囲気、自然と笑みを漏らした。

次にたどり着いた場所は艦内の奥深くにある機関室だった。内部は薄暗く三階分吹き抜け構造になっており、至る所に制御盤があり、モニターやランプが点灯しており、薄暗い機関室の中では星のように見えた。それぞれの制御盤には士官から水兵と、幅広い階級層の

機関士が配置についていた。中央にはエンジン本体と思しき機械構造物があり、それに密接するように頑丈な装甲に囲まれた円筒状の部屋があり、かすかに呻っているのが聞こえる。

「あれがエンジンなんですか？機関室なのにずいぶん静かですね。」

信は構造物と円筒状の部屋を指差して艦長に聞いた。ここは信がイメージしていた、シャフトや歯車やピストンが轟々と音を立てているような機関室とは全く異なるのだから無理もない。

「そうだよ。あれが本艦の心臓部・波動エンジンだ。」

艦長は聞きなれない言葉を発した。

「宮本機関長。」

艦長は初老の筋肉質な中佐を呼び止めた。

「はい。艦長。」

「こちらが本艦の新しい仲間だ。」

「有賀信と申します。」

信は砲術長の時と同じように機関長に向かって敬礼した。

機関長も直ちに返礼した。

「わしは機関長の宮本^{たける}猛だ。階級は中佐。よろしくな。」

いかにもベテランの機関士らしい、凄みの効いた声だ。

「こちらへおいで。波動エンジンについて教えてやるよ。」

機関長に招かれ、信と艦長は円筒型の部屋に向かった。この部屋はバイタルパートと同じように合計で厚さ六〇〇ミリになる装甲に覆われており、入り口は三重の装甲扉があった。中に入ると、無数の青白い光が漂っていた。部屋の中央には奇怪な形状のな構造物が鎮座していた。炉心と思われる直径約四メートルの球体には幾つもの窓が開いており、中が激しく発光しているのが分かった。また、その球体は壁や床から伸びる支柱によって支えられ、幾本もの伝道管と思しきパイプが接続されている。その姿はどこか有機的で人間の心臓に見えなくもなかった。

「まず、これが宇宙エネルギー圧縮炉だ。そして、この一番太い伝道管を通してエンジン本体へ送られる。」

機関長は各部を指差しながら説明する。

「この波動エンジンは、宇宙エネルギーを圧縮し超光速タキオン粒子に変換して動力とする。事実上の無限動力機関であり、粒子が反動推進剤をも兼ねるため航続距離も無限大となる。その性能は光速をはるかに超える加速が可能となる。」

機関長はゆつくりと、一つ一つの単語をかみ締めるように説明してくれた。

「宇宙エネルギー？ 光速？ 光の速さを越えるんですか？」

信は不思議そうに聞いた。

「その通りじゃ。ただし、まだ光速を超える運転は行っておらんがね。」

「こんなSFみたいな技術が実用化されていたなんて。」

まほろばの想像を絶するテクノロジーを前に、驚く他はなかった。

廊下を歩いていると信は、鳥居があるのに気付いた。

「艦長。あの鳥居は・・・」

「ああ、本艦の艦魂を祭る神社だよ。」

艦魂といえば、昨日と今日の間辺りの深夜に現れた水干姿の愛らしい少女だろう。

「艦長、実は昨日、艦魂に会ったのですが・・・」

信はとりあえず、昨日の出来事を艦長に報告してみた。

「おお、そうか。水干が似合う愛らしい女の子だろう？」

やはり、昨日見たのは幻覚ではなかった。

「艦魂は特定の人しか見えないという話を聞いたことがあります、まほろばにはそういう人は何人乗っているんですか？」

すると、艦長から意外な答えが返ってきた。

「全員だよ。まほろばの艦魂は特殊な存在らしい。乗組員全員が艦魂が見える特殊な人間であるとは考えられんな。」

艦長は簡単な考察を話してくれた。

「信。艦長。こんにちは。」

二人が会話をしていると少女が挨拶する声が聞こえた。信は声が出た方を振り返ると昨日と同じ白の水干と括袴を着けた少女が立っていた。

「わっ！いたの？」

信は驚いた。

「何で驚くの？」

艦魂の少女は少し頬を膨らませていた。軽く怒っているようだ。

「いや、別に、その・・・」

信は少女に睨まれて少し慌てていた。

「まあ、そう怒らないでやれ。慣れない存在に戸惑うのは君も同じだろう。」

艦長がなだめてくれたおかげでまほろばは信を睨むのをやめた。

「ごめんなさい・・・」

まほろばはシユンと俯いてしまった。

しかし、そこまでシユンとされると信は帰って申し訳なかったのだろうか、少女を慰めようとした。

「ごめんね。驚いちゃって。」

信はそう言っていると、少女の頭をポンと優しく撫でた。すると少女は、

「っ！」

と声にならない声をあげて、白い顔をリンゴのように真っ赤に紅潮させた。

自然と女の子の頭を撫でてしまい、そんな反応をされて、信はハッとした。

「ご、ごめん！」

そう言っただけで慌てて手を離れた。信の童顔もまほろば同様に真っ赤だ。

「うっん、いいの！　だ、大丈夫だから・・・！」

まほろばは顔を真っ赤にしながらブンブンと首を振っていた。

「有賀君。意外とウブなようだね。」

東雲艦長はクッククツと笑いながらきこちない会話を見守っていた。

信は艦長、艦魂まほろばと三人で最上甲板に上がった。信が「もう一度甲板に上がりた

い」と申し出たのだ。十八ノットで走る戦艦まほろばのマストには軍艦旗がはためいていた。

信はその軍艦旗が旧日本海軍のものとも海上自衛隊のものとも違うことに気がついた。

マストに掲げられているその旗に描かれている太陽は赤くなかった。

「艦長、どうして黒い太陽なんですか？」

信は艦長に聞いてみた。

すると、艦長はいつもの温厚な表情から厳しい表情に変わった。

「あの旗・・・あの黒い旭日旗は喪章だよ。」

「喪章？」

艦長に答えに信は疑問を浮かべるだけであつた。

「かの大東亜戦争・・・兵士も民間人も大勢死んだ。未来のある若者達も子供達も大勢・・・死んでゆく者には老若男女関係無かつた。そして、敗戦後、愛する者を護るために戦い命を投げ出した多くの兵士達は侵略者として糾弾された・・・。しまいには『靖国神社を解体せよ』などと言いつつ輩もいる。このままでは彼らは居場所を失ってしまう。だから、そうならないよう、我々に出来ることをせねばなるまい。その一つがあの黒い旭日旗だよ。あれは今、黙して眠る戦士達の鎮魂の旗だ！」

東雲艦長は厳粛な表情で一句一句に思いを込めて言った。

「そ、そうだったんですか・・・」

信は、内心怖いと思った。「まほろば」の名を告げられたときも見た表情だ。一瞬だけ感

じたが、その表情は悲しみと怒りと悔いが入り混じり渦巻いているようにも見えた。

そのとき、まほろばも表情を変えた。

「まほろば？」

少女のあどけなく可憐な顔は泣きそうに歪んだのだ。

女の子の涙に対する免疫力が弱い信は焦ってオロオロした。

「まほろば。いつものこととはいえ、すまない。しかしな、お前だけで気に病むことはないのだよ。もとを言えばわしの責任なのだ。」

艦長はそう言うと、まほろばの髪を優しく撫でた。

まほろばはしゃくり上げながらもコクリと頷いた。

「有賀君。この子は大切な使命を帯びているのだ。しかし、この子にはあまりにも重過ぎる。何とぞ支えになってほしい。」

艦長は信の方に向き直り、肩に手を置いて強く言った。

艦長と別れてから信は、まほろばと部屋で遊んでいた。

一つの椅子に半ケツして、パソコンをつけて面白いスレッドはないかと検索する。

『やる夫は連合艦隊司令長官のようです』

『ふしぎの海の翠晶石』

『やる夫で学ぶ砲術』

『十五美少女漂流記&やる夫』

『やる夫はブルーノアの艦長のようです』

『やる夫は上を向いて歩くようです』

『ブルーノートやる夫』

『やる夫とやらない夫は同期の桜』

『やる夫で学ぶトランペット』

『超時空世紀やる夫』

『やる夫で学ぶ歴史上の変態紳士・変態淑女大全』

二人は才能の無駄遣いを前に腹筋が崩壊するほど笑った。

「信さん。晩御飯ですよ。」

二人が笑いすぎて腹をすかせた頃、丁度翔子がやってきた。

信とまほろばは部屋を出て、食堂へと向かった。

日本海軍は食事には気を遣っていたことは有名であり、陸軍の兵士が驚いたほどだ。それは、まほろばも例外ではない。ましてや現在のまほろばには何処の国の軍隊も導入していないような最新の設備のおかげで食料の保存は言うまでも無く、調理も陸地のレストラン並みのものを行うことが出来る。おかげでメニューが多彩なのだ。変動はあるが、目安は次のようになる。

日曜日

朝・白米飯、玉ねぎと油揚げの味噌汁、梅干、

昼・食券、選択形式

夜・白米飯、クリームシチュー、ハンバーグ、ボイルした野菜、各種ドリンク

月曜日

朝・白米飯、わかめの味噌汁、卵焼き、塩じゃけ、ほうれん草のおひたし、好みでお茶、コーヒー

昼・食券、選択形式

夜・白米飯、ほうれん草と油揚げの味噌汁、トンカツ、刻みキャベツ、各種ドリンク

火曜日

朝・食パン（枚数は好みで）、ジャム、マーガリン、ピーナッツバター、コンスープ、目玉焼き、ウインナー3本、ベーコン入りキ

ヤベツ炒め、牛乳1パック

昼・食券、選択形式

夜・白米飯、ジャガイモの味噌汁、魚料理（焼き魚、煮付け、刺身等が日によって変わり、魚の種類も季節によって変わる。）、野菜の煮物

水曜日

朝・白米飯、玉ねぎとわかめの味噌汁、いり卵、ベーコン、コーン
サラダ（レタス、人参入り）、牛乳1パック

昼・食券、選択形式

夜・白米飯、澄まし汁（しいたけ、鶏肉、春雨、ほうれん草）、魚料理、野菜の煮物

木曜日

朝・食パン、コンソメスープ、目玉焼き、ベーコンとジャガイモの炒め物、牛乳1パック

昼・食券、選択形式

夜・白米飯、豆腐とわかめの味噌汁、豚のしょうが焼き、サラダ、果物

金曜日

朝・白米飯、玉ねぎとわかめの味噌汁、いり卵、ベーコン、コーン
サラダ（レタス、人参入り）、牛乳1パック

昼・食券、選択形式

夜・白米飯、野菜スープ（基本はトマト、にんじん、ジャガイモ、キャベツ。季節によって変化あり）、オムレツ（日によって野菜や肉などの具入り）、サラダ

土曜日

朝・食パン、目玉焼き、ベーコンとジャガイモの炒め物、牛乳1パ

ツク

昼・食券、選択形式

夜・カレーライス、サラダ、果物、ヨーグルト

という具合に、これ等を標準とし、少々変動がある。

正月には雑煮、餅、おせち料理が、祝日・祭日・その他の行事の日には特別なご馳走が出ることもある。

ちなみに本日は・・・何と特別メニューであつた！

「信さんの歓迎会つてことでコック長の巖鍋少佐がすつごく張り切っていたんだから。」

驚いている信に背中をバシバシ叩きながら翔子が言った。

テーブルに並んでいた料理はなかなか豪華なものだ。

ビーフシチューとライス、鯛のお造り、寿司、手作りのピザ、ローストビーフ、蟹とポテトと卵と香草のサラダ、生ハムとサーモンとイクラのパスタ、マカロニ料理（ホワイトソース、ミートソース）、デザートにガトーショコラ、抹茶ムース、エクレア、各種アイスクリームが並んでいた。

「よう！君が有賀信君だろう？」

気さくに声をかけ、やってきたのはコック服を端正に着こなした背の高い髭をたくわえた男だ。

「俺は烹炊長の主計少佐・巖鍋美次郎だ。いわなべよしじろう 美味しい飯を食わせてやるからな。」

「初めまして。今後ともよろしく願います。」

少佐であると分かったので、信は敬礼をしようとしたが、

「堅いぞ。君の歓迎会なんだからもっとリラックスするもんだ。」

と、巖鍋少佐は両肩に手を置きながら豪快な笑顔で言った。

信は翔子やまほろば、巖鍋少佐に背中を押され、席に着いた。

周囲の席には艦長や副長、源田兵曹長、雄太、潤、拓真、康夫、春花が席についていた。

グループ中には見知らぬ顔もあつた。信の救出の時にはいなかったメンバーだ。

「初めまして。私は澤田百合子です。信さんのことは拓真君から聞いています。」

百合子と名乗った少女は愛らしい少女であつた。しかし、その愛らしさ以上に目立つのが、雪のように真っ白な長髪とルビーのように赤い瞳だつた。

「こ、今後ともよろしくお願い致します。」

信は百合子の常任離れした特長に戸惑い一つも深めに頭を下げた。挨拶を済ませると信も席に着いた。

「源田君。主催者挨拶を頼むよ。」

艦長に声をかけられ、源田兵曹長は簡易ステージに立った。

「皆、聞いて欲しい。本艦はめでたく新しい仲間・有賀信君を迎えた。ならば盛大に祝つてやらねばなるまいとして、このパーティーを早急に企画した。有賀、ちよいとこっちへ来て自己紹介してくれ。」

源田兵曹長は手招きをした。

信は簡易ステージに上がり、兵曹長と並んだ。

「皆さん初めまして。僕は有賀信と申します。『月刊みりたりー解体新書』を始め、その他数冊にて連載と読み切りをやっています。軍ヲタです。今後ともよろしく願ひします。」

マイクを受け取ると緊張しながらも自己紹介を終えた。

すると盛大な拍手と歓声が起こった。

「すげー！ 本物だ！」

「あとでサインくれよ。」

「ウホッ！ いい少年。」

「あとでスケブかいてねー。」

読者と思われる層からはとくに熱い声が届いた。

信は「あとで描きますよ。」と言うと席に戻った。

源田兵曹長は信が席に着くと飲み物が入ったグラスを手に取り再

びステージに上がった。

「皆。準備はいいかー！」

「oooooooooooo」

「グラス、そんな持ち方で大丈夫かー！」

「oooooooooooo大丈夫だ。問題ない！oooooooooooo」

「有賀信君の来艦を祝って、乾杯！」

「ooooooooooooカンパニー！oooooooooooo」

皆、乾杯を済ませるとご馳走の山にありついた。

空腹だった信は湯気と食欲をそそる匂いが立ち上るビーフシチュウをかきこみ始めた。戦艦まほろば自慢の料理はどれも美味しかった。

「信。美味しい？」

隣に座るまほろばはピザを頬張りながら聞いてきた。

「うん。まほろばは凄いいね。海上自衛隊の護衛艦に体験乗艦したことはあるけど、まほろばの方が料理も設備も凄いいよ。」

信はまほろばの方を向いて言った。

まほろばはポツと頬を桜色に染めた。艦魂にとって艦を褒められることは自分を褒められることと同義なのだ。

「ところで、まほろば。」

「何？」

「口の周りにご飯粒が付いてるよ。」

信はそう言うといよいよにご飯粒を取り、食べた。

するとまほろばは、ボンッ！と更に顔を赤く染めた。

「ほお。」

「へえ。」

「わあ。」

「ふーん。」

「ほうほう。」

「.....」

「あらあら。」

「おー。」

「ほっほっほっ」

「クククク」

潤、翔子、雄太、康夫、春花、拓真、百合子、兵曹長、艦長、副長がニヤニヤしながら信の方を見ていた。

信とまほろばは顔を日の丸のように真っ赤に染めてうつむいてしまった。

「有賀、まほろば、褒美にとっておきの清酒をやろう。」

源田兵曹長はやはりニヤニヤしながら清酒をグラスに注いでよこした。

「「アリガトウゴザイマス」」

信とまほろばは乾いた声で礼を言った。そして、しばらく透き通った液体が入ったグラスをじっと見つめ、グイッと飲み干した。

そして顔どころか手まで紅葉のように真っ赤に染まった。

「いよっ！ いい飲みっぷり！」

パチンと手を叩きながら源田兵曹長は言った。

何日ぶりのことだろうか。信は東京に出てきてからはこのように沢山の料理を皆で囲んで食べる機会など殆どなかった。アパートで一人で寂しい食事の毎日であった。しかし、今こうして、出会ったばかり、知り合ったばかりの皆と食事をしている。皆は信を快く迎え入れてくれた。

「なーに感傷に浸ってるんスか？ 食いねえ食いねえ！」

信の心中を察したのか、康夫はシチューのおかわりとローストビーフとイクラ、トロを皿に盛ってよこした。

「あ、ありがと・・・」

信は少々驚きながら皿を受け取った。

「信お兄さん。私と烹炊長の特製デザートですよ。まほろばちゃんもどうぞ。」

今度は百合子が色とりどりのパフェを持って来た。百合子と烹炊

長が二人でアイディアを出し、作ってみたのだという。マロンアイスやキャラメルアイスが使われた、いかにも美味しそうなパフェだ。信は烹炊長の方を見ると、烹炊長のドヤ顔がみえた。

「信、美味しいね。」

まほろばは、ほっぺに栗の欠片を付けながら満面の笑みを浮かべていた。

信はそれを見てクスリと微笑みながらも「うん」と頷いた。

食事の傍ら、吹奏楽団やバンドの演奏が行われた。曲はおなじみの「軍艦マーチ」のアレンジに始まりジャズやラテン、ポップス、ロック、メタル、アニメソング等が演奏された。他に有志で整備兵達のダンスや、様々な部署がコント、手品、その他の隠し芸が披露された。そんな中で、会場が一体となって皆合唱したり踊ったり大爆笑したりした。最後に再び吹奏楽団とバンドが一曲演奏しトリを飾った。

夜の二二〇時に差し掛かった頃、料理は綺麗に食べつくされ、パーティーはお開きとなった。

食事を終わると信はまほろばに案内されて艦橋へ向かった。

「どうしたの？」

「来てみれば分かるから。」

詳しく教えてはくれないが、来て欲しいということだけは分かった。信は疑問符を浮かべつつもまほろばの後を付いていった。

艦橋に上るためのエレベータに二人で乗り込むと、まほろばは最上階へのボタンを選択した。エレベータは第二艦橋を通過し、更に上の階へと昇って行った。

「着いたわ。」

エレベータが止まるとまほろばは信を連れて外に出た。

すると、潮風が二人を包み込んだ。恐らくここはかつての防空指揮所だろうと信は思った。

「見て。」

まほろばにそう言われ、辺りを見回すと信は思わず感嘆の声を上げた。

「わぁ！」

そこには息を呑むような世界が広がっていた。

濃紺の背景に、無数の金銀やダイヤモンド、ルビー、サファイアを散りばめたような星空が。もはや星座が分からないくらいに、東京都心では見えないような星も光り輝いていた。それは、地球にいる感覚を忘れ、宇宙を飛んでいるかのような錯覚を覚えるほどであった。

「すごい！　こうやって星を見るのは初めてだよ。」

信は星空を見上げながら言う。

「ありがとう。まほろば。」

信は満面の笑みでまほろばに向き直った。

まほろばも可憐な笑みを浮かべて信の瞳をじっと見つめた。

「信！」

まほろばは突然信に飛びついてきた。

信はドキツとし、驚きながらも少女を受け止めた。

「信、来てくれて嬉しい。改めてよろしくね。」

彼女の目には嬉し涙が浮かんでいた。

「ようこそ。戦艦まほろばへ。」

まほろばはそう言うのと信の胸に顔をうずめた。

信はしっかりと抱きつく少女に少し戸惑いながらもフツツと笑みを浮かべ、さらさらの長い黒髪を撫でた。

【第五章・戦艦まほろば出撃・後編】（後書き）

まほろばには原作と同じように黒い旭日旗が掲げられています。そういえば、なんか作中では食事の描写が詳しすぎるかもw まあ、仕方ありません。エネルギーがなければ軍艦は動かないのと同じで、飯が無いと兵隊は動きません。

それと、新キャラが登場していますね。そのうち、キャラクターシートも投稿する所存です。

【番外編一・キャラクター紹介】（前書き）

これまでに登場したキャラクターを紹介します。

【番外編一・キャラクター紹介】

○ あるがしん 有賀信

性別・男

年齢・二十一歳

身長・一七ーセンチ

職業・イラストレーター

本編の主人公。東京に住んでいた青年。童顔であるため少年扱いされることもある。髪は癖っ毛。ミリタリーヲタクで、数種類の雑誌で読みきりや連載をしている。人当たりのよさがとりえだが、お人よし過ぎることも。戦艦まほろばとはどんな関係があるのか？

○ まほろば

性別・女

外見年齢・一三歳

身長・一五二センチ

階級・少将相当

戦艦まほろばの艦魂。本編のメインヒロイン。白い肌と前髪を切りそろえた長い黒髪が特徴的な美少女。大東亜戦争を生き延び、連合国に接収されることもなく、長い間信を待っていたという。そして、度々信の夢に現れるようになった。普段は水干に差袴の和装をしていることが多い。

○ しのめ げんじゅうろう 東雲厳十郎

性別・男

年齢・？歳

身長・一八五センチ

階級・少将

職業・戦艦まほろば艦長

戦艦まほろばの艦長。専門は砲術。人当たりがよく温厚な好々爺だが何隻もの軍艦を乗り継ぎ、終戦の年にはまほろばに乗っていた。大東亜戦争を生き抜いてきたベテランの軍人。感性が若く、多趣味でアンティークからサブカルチャーまで何でもござれな人。若者や子供との交流を積極的に楽しむ。信のイラストや漫画が連載されている雑誌を講読している。美食家でもあり、見かけによらず甘いものには目が無い。

○ 榊征一郎 さかき せいいちろう

性別・男

年齢・？歳

身長・一八四センチ

階級・大佐

職業・戦艦まほろば副長

戦艦まほろばの副長。専門は航海。初老の紳士。陸の上では「厳十郎旦那様」の執事ということになっており、身の回りの仕事を丁寧にこなす。几帳面な性格は艦内でも発揮され、冷静かつ的確に艦長を補佐する。また操艦や車の運転にも長けている。真面目だが堅物というわけではなく、紳士的で優しい性格により階級を問わず慕われている。

長谷川グループ（悪友小队）

○ 長谷川潤 はせがわ じゅん

性別・男

年齢・一七歳

身長・一七〇センチ

階級・一等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・砲術科射手

砲術科の水兵の中でも艦橋の射撃指揮所に勤務する唯一の水兵。砲術長からその才能を認められている。東雲艦長や榊副長を除いてはまほろばの乗組員の中でも最も早く信と親しい仲になる。潤、翔子、雄太、拓真、春花、康夫、百合子で構成されるグループのリーダー格で、真っ直ぐな少年。

○ 櫻井翔子 さくらい しょうこ

性別・女

年齢・一七歳

身長・一六〇センチ

階級・一等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・航海科電探手

航海科の水兵。艦橋勤務で、電探の扱いを担当する。非番の時は潤と行動することが多い。髪型はややラフなおかつぱの黒髪。中学時代以来胸があまり成長していないのを気にしている。航海科一のVIPperとも言われており、やる夫スレを立てることもあるらしい。

○ 神崎 雄太 かみざき ゆうた

性別・男

年齢・一四歳

身長・一六二センチ

階級・二等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・航海科電探手

航海科の水兵。翔子と同じく艦橋勤務で、電探の扱いを担当する。先輩である潤や翔子を慕っている。小柄で華奢な優男だが、射撃の腕前は良く、東雲艦長から表彰されている。

美少年なので艦内の女性（シヨタコン層）に狙われることもしばしばあるらしい。

○ おおの たくま 大野拓真

性別・男

年齢・一八歳

身長・一八五センチ

階級・一等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・機関科

機関科の水兵。グループの中でも最も大柄で筋肉質。目の細い温厚な顔立ちで周囲を落ち着かせてくれる。見かけによらず琴や竜笛が得意であるという雅な一面も。本人曰く、公家文化嗜好。かといって若者文化やポップカルチャーを見下すようなことはせず、むしろ楽しんでる節もある。

○ あきやま はるか 秋山春花

性別・女

年齢・一五歳

身長・一五八センチ

階級・二等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・内務科司書補佐

内務科の水兵。艦内図書館の司書補佐。天真爛漫な性格で、髪型は短めのツインテール。実は下ネタ好きで雄太にセクハラすれすれの行為をすることも。腐女子でもあり、潤率いるグループとは別に、艦内に同人サークルを持っている。同人誌の内容は、艦長曰く、衆道文化の伝統を今に引き継ぐ漫画とのこと。なぜか整備兵にもファンが多い。

○ たじま やすお 田島康夫

性別・男

年齢・一六歳

身長・一六九センチ

階級・二等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・砲術科対空射手

砲術科の水兵。明るくひょうきんな少年。猫口気味なので常に笑顔に見える。ニカツと笑う顔はいたずら小僧の様な雰囲気。グループのムードメーカー的存在。体は細いが拓真以上に大飯喰らい。ただし、人の食べ物を奪うことはしない。なお、某国会議員ではない。通称「ヤッシー」。

○ 澤田百合子 さわだ ゆりこ

性別・女

年齢・一六歳

身長・一五五センチ

階級・二等水兵

職業・戦艦まほろば乗組員・主計科烹炊兵

主計科の水兵。おとなしく控えめな少女。アルビノのため白い髪とルビーのような紅い目が特徴的。しかし、特別病弱なわけでもない。お菓子作りが得意で烹炊長の巖鍋少佐とお菓子の研究していることも多い。巖鍋少佐を尊敬している。

○ 源田 鉄二 げんだ てつじ

性別・男

年齢・三七歳

身長・一八二センチ

階級・兵曹長

職業・戦艦まほろば乗組員・砲術科射手

悪友隊の顧問的存在。面倒見の良い頼りになる兄貴のような人。トラックで華麗なるカーチェイスを披露する。何度も警察に追われるも、一度も捕まったことが無い。

艦橋勤務兵

○ 緑川幸男 みどりかわ ゆきお

性別・男

年齢・二二歳

身長・一七五センチ

階級・水兵長

職業・戦艦まほろば乗組員・航海科ソナー員

艦橋勤務のソナー員。水兵の中でも最年長クラス。まほろばのソナー員の中でも特に耳が良い。敵艦内でコインが落ちる音も聞き分けるほどの能力があるらしい。

各科の士官

○ 巖鍋美二郎 いわなべ よしじろう

性別・男

年齢・四五歳

身長・一八八センチ

階級・少佐

職業・戦艦まほろば乗組員・主計長兼烹炊長

主計長。かつて一流レストランで働いていたベテランコック。百合子の師匠。腕力は非常に強力でこの人のビンタは「体罰」ではなく「殺人」らしい。もっとも、味方にはその力を振るうことは無い。

○ 源修 みなもと おさむ

性別・男

年齢・五一歳

身長・一八三センチ

階級・少佐

職業・戦艦まほろば砲術長

戦艦まほろばの砲術長。元自衛官。技術に明るく、しばしば新兵器の開発にも携わる。技術科と共同で荷電粒子砲や対空レーザー高角砲の開発を推進した。

○ 宮本猛 みやもと たける

性別・男

年齢・六七歳

身長・一七九センチ

階級・中佐

職業・戦艦まほろば機関長

戦艦まほろばの機関長。エンジンに関して絶対の自信を持つ。

○ 阿部大尉 あべ たいい

性別・男

年齢・三五歳

身長・一八六センチ

階級・大尉

職業・戦艦まほろば乗組員・技術科整備長

技術士官。いわゆる「いい男」である。部下の整備士にも数名ホモがいる。実は春花のサークルの本の読者。ジャケットを見ただけで「ウホッ！いい本。」と漏らしてしまい、春花からは「買わないか」と言われた。何かと危なそうな人だが整備の腕前は良く、パイロットからも信頼されている。（実はパイロットも何人が食ってしまったらしい。）整備士で結成されるダンスグループのリーダーでもある。

民間人

○ 石山頼三 いしやま らいぞう

性別・男

年齢・四七歳

身長・一九〇センチ

職業・喫茶店「オータムリーブス」のマスター

信の行き着けの店である「オータムリーブス」のマスター。料理の腕が良く、店のメニューは好評である。中学生時代にテナーサックスを手にし今に至るその腕前はなかなかのものである。人一倍度胸があり並大抵の不良やヤクザには動じない。家族思いの良き父親。

○ 石山静流 いしやま しずる

性別・女

年齢・四四歳

身長・一六二センチ

職業・喫茶店「オータムリーブス」のママ

頼三の妻。四〇代ながらも若さを保っている美人。主に菓子類担当。新作のケーキができる的信に無料で食べさせてくれることもある。ピアノが得意。トラブルに強い。

○ 石山馨 いしやま かおる

性別・男

年齢・一三歳

身長・一五六センチ

職業・中学2年生

頼三の息子で、香織の双子の兄で兄妹共に容姿が似ている。休日は

よく店を手伝う。楽器が得意な両親の影響でクラリネットを手にし、学校では吹奏楽部にて活動している。他にドラムやギターも頼三から教わっている。

○ いしやま かおり
石山香織

性別・女

年齢・一三歳

身長・一五六センチ

職業・中学2年生

頼三の娘で、馨の双子の妹。兄と共に休日はよく店を手伝う。フルートを手にし、学校では兄と共に吹奏楽部にて活動している。他にベースも弾ける。

○ わたなべ ただはる
渡辺忠治

性別・男

年齢・六四歳

身長・一六六センチ

職業・アパート「桜木荘」の大家

信の住むアパートの大家。不況の中頑張る信を心から応援してくれる。

○ わたなべ よしえ
渡辺好恵

性別・男

年齢・五五歳

身長・一六〇センチ

職業・アパート「桜木荘」の大家夫人

信の住むアパートの大家夫人。夫と共に信を見守ってくれる。

【番外編一・キャラクター紹介】（後書き）

今後も新キャラが登場します。艦魂が登場することは言いつまでもありません。

【第六章・小笠原沖海戦】（前書き）

小笠原諸島沖にて味方の輸送潜水艦と合流する戦艦まほろば。しかし、そこには敵の魔の手が・・・

【第六章・小笠原沖海戦】

【第六章・小笠原沖海戦】

「レーダーより。右舷一〇〇海里に賀島列島^{むこうしま}確認。」

翔子の報告が艦橋に響いた。

戦艦まほろばは小笠原諸島沖に到着し、機関を停止した。

「桢副長、小笠原で何をするのですか？」

信は操舵手に替わって舵輪を握る桢副長に聞いてみた。

「潜水艦が荷物が届けてくれることになっていてね。それで事前に会合場所をここに決め

ておいたんだよ。」

副長は舵輪を丁寧な操りながらも優しい口調で説明してくれた。

「輸送用の大型潜水艦だ。その艦からテスト航海と出港準備に押されて紅玉島では配備が

間に合わなかった内火艇とVTOL戦闘機と補給物資を受け取るこ
とになっている。」

東雲艦長も詳しく説明してくれた。

「艦長、音声通信が入りました。伊 九〇〇潜からです。」

若い艦橋通信兵が報告を入れた。

「スピーカに回せ。」

艦長の命令を受けて通信兵は受信した内容をスピーカにて再生し
た。

《我、伊 九〇〇竜宮。宅配便の到着により、貴艦の左舷四〇〇メ
ートルの位置に

浮上するものなり。》

性能の良いスピーカから輪郭のはっきりした洪い声が聞こえてき
た。

その直後、まほろばの左舷の方向に何か浮上してくるのが見えた。

海面が大きく盛り上

がり、艦首が出現した。信は海上自衛隊のマリンフェスタにて潜水艦を見物したことがあ

るが、それよりも遥かに大きいものに感じた。それどころか、米海軍が保有する世界最大

クラスの戦略潜水艦よりも大きいものであることが直感で分かった。

浮上してきた艦は全長二〇〇メートルを越える幅の広い船体を持ち、艦尾に推進器と思

われる巨大な四機のノズルを、ノズル周辺に整流フィンを備えた、従来の潜水艦とは似て

も似つかないフォルムであった。どちらかというと宇宙船のようにも見えた。

「あれが伊 九〇〇竜宮だ。超電磁誘導推進を採用し、他に類を見ない静粛性と速

度と機動性を誇る高速大型輸送潜水艦だよ。」

輸送潜水艦伊 九〇〇竜宮はスラスタを作動させながらゆっくりとまほろばの

艦尾の格納庫に向かって横滑りして接近して来た。そして、互いの距離が約一五メ

ートルほどのところで停止した。

すると、幅広く長大な艦首の貨物区画の巨大なシャッターが開き、同時に艦橋の

すぐ前の甲板が開いてクレーンが現れた。

長大なクレーンは貨物区画から信が見たこともない型のVTOL戦闘機を吊り上げ、慎

重にまほろばの艦尾の飛行甲板へと運ぶ。全部で三機VTOL戦闘機と小型ジェツ

ト飛行艇四機、内火艇八隻、補給物資が入ったコンテナ八つがまほろばへと運ばれた。

まほろばに運ばれた艦載機を見に行こうと信は後部甲板に向かった。後部甲板に着くと、昨日は水干姿だった艦魂の少女は純白の士官第二種軍装に身を包んでいた。

金ボタンのついた純白の制服は端正な顔立ちの少女を凛々しく見せていた。

「おつす。まほろば。」

信は気さくに声をかけた。

まほろばはいつもの可愛らしい笑みを浮かべながら小さく手を振った。

「そついえば、そろそろ来る頃かな。」

「え？ 誰が？」

信は、まほろばの言っていることが分からずに首をかしげるばかりだ。

そのとき、まほろばのすぐ右の空間が金色の粒子を帯びながら緑色に輝きだした。

信には何が起こっているのかわからなかった。

粒子は次第に人型をなしていくのが分かった。それはすぐに顔立ちがはっきりと認識できる状態となった。

「伊 九〇〇竜宮、まほろば司令へ報告に上がりました。」

実体化するなり海軍式の敬礼と共に元気よく挨拶をしたそれは、まほろばと同じ

ように士官第二種軍装を纏った少女だった。外見はまほろばと同じ年に見えるが、

より明るい印象を受けた。髪型はボブカットで明るい性格の彼女に良く似合っていた。

「ご苦労様。お茶を出すから中へ入って。」

まほろばはリストをつけ終わると一緒に来るように促した。

「司令？君が？」

どう見ても一〇代前半の少女にしか見えないまほろばが「司令」と呼ばれている

のを聴いて、信は不思議がった。やはり「司令」は年配のベテランがなるものだと

いう印象が少なからずあるのだろう。

「ときにまほろば司令、そちらの殿方はどなたですか？」

伊 九〇〇の艦魂は信のほうを向きながら聞いた。

「有賀信。私の新しい乗組員。」

「初めまして。有賀信と申します。イラストレーターやっています。どうぞよろしく。」

信は愛想よく挨拶した。

「改めて、伊 九〇〇竜宮と申します。今後ともよろしく。」

元気の良い眩しい笑顔で再び海軍式の敬礼をした。

まほろば、信、そして竜宮は使われていない将官室に入った。大型戦艦だけあって艦内の

のスペースには余裕があり、兵員室や士官室の何部屋かは使われていない。まほろばの言

うことには、そういった部屋は艦魂が使うらしい。

「座って。」

まほろばは、信と竜宮にソファーに座るようにすすめた。

「ありがとう。」

「ありがとうございます。」

信はソファーに座ると改めて部屋を見回した。一角には艦長から贈られたという人形やぬいぐるみが飾られており、また別の一角には花が生けてあった。本棚には軍事関係の資料の他に小説や少女漫画も置かれている。本棚の上には可愛い宝石箱がある。蓋が開いており、中にはこれまた可愛らしく宝石（本物）をあしらったア

クセサリーが入っていた。全体的には落ち着いた色合いの部屋だが、女の子特有のものが多数あり、独特の雰囲気を出していた。

「ご苦労様。お茶でも飲んでゆつくりして行つて。」

まほろばは報告書にさつと目を通すと緑茶とキキョウ型や桜型の練り切りを持ってきてくれた。

「ありがとうございます！ まほろば司令。」

竜宮は嬉しそうに目を輝かせた。

「一体どうしたの？ 高そうな和菓子だね。」

信の毎度の驚きように、まほろばはクスリと微笑んだ。

「戦艦まほろばの主計科にはすごい和菓子職人さんもいて、他にもベテランの料理人は士官待遇で働いてくれるの。烹炊所の菓子研究部に行けば合えると思う。」

信は、相変わらず何から何まで乗組員に気を遣った凄い艦だと思った。感心しながら上品な香りのする練り切りを口に運んだ。これまた上品かつ繊細な甘味が口いっぱいに広がった。

「んー！ 美味しい！」

竜宮は顔をホッコリとほころばせ、この上なく幸せそうな顔をしていた。

「ところで信君はまほろば司令のどんな様？」

「「ぶっ！」」

竜宮の突然の問いに二人はお茶を噴出した。

「違う！ 信はそんなんじゃない！」

「違う！ まほろばはそんなんじゃない！」

二人の焦り具合は見事にシンクロした。

「んふふ、ちよつとからかっただけですよ。」

竜宮は悪戯な笑みを浮かべて交互に信とまほろばの顔を見た。

「「もっ！」」

信とまほろばは顔を真っ赤に染めながらため息をついた。

「それでは失礼致しました。まほろば司令。」

竜宮はまほろばや信と敬礼を交わすと自艦へと戻っていった。信とまほろばは艦橋へ戻

っていった。輸送潜水艦伊 九〇〇竜宮はスラスターを作動させながらゆつくりと戦

艦まほろばを離れていった。そして一〇〇〇メートルほど離れた辺りで潜航を始め

た。まほろばも微速で前進を始めた。

「艦長！ 本艦の一一時の方向の水中に機械音です。距離は一万メートル。」

ソナー手の緑川水兵長が報告する。

「敵潜か？」

「わが軍の艦とは音が違います。恐らくは地球の目の艦かと思われます。それも二隻のようです。」

耳の良い緑川水兵長は見事に聞き分けた。

「艦長！ 竜宮も二隻の敵潜を捉えたようです。」

通信兵からも報告が入った。

「速度を三〇ノットまで上げよ！ 全艦、対潜戦闘用意！」

東雲艦長は即座に命令を下した。微速で進んでいたまほろばはスムーズに加速を始めた。

「全艦、対潜戦闘用意！」

榊副長は艦長に続いて復命した。

全艦に命令が行き渡ると、水雷科が魚雷、爆雷等の各種対潜兵器の準備を始めた。

《こちら水雷科。艦長に意見具申。一〇式魚雷を試してはいかがでしょう？》

水雷長からの意見が艦橋に届いた。

「おう。公試を済ませたばかりの魚雷だったな。よろしい。は許可する！」

艦長は即座に許可を下した。

「間違いないな？」

秘密結社『地球の目』の潜水艦『アラストル 5 ジェイダイト』のヘルゴストス艦長がソナー手に問う。

「はい。間違はなく奴は『マホロバ』です。」

ソナー主の報告を受けてヘルゴストス艦長と傍に控えるショーとヘアの目つきの鋭い女はほくそ笑んだ。

「いかに改良しようが我が『地球の目』のアラストル級の前にはマホロバなど前大戦の遺物だ。」

「そうよ。あんなオンボロ軍艦がいまだに現役なんてお笑い種ね。」
ヘルゴストス艦長の傍に控える女はアラストル 5 ジェイダイトの艦魂である。

「アラストル 6 ネフライトに連絡。水雷戦用意！」

命令を下すと早急に準備が始まり、発射管に魚雷が装填された。

「アラストル 6 ネフライトより。発射準備完了とのこと。」

「本艦も準備完了。」

準備完了の報告を受けてヘルゴストス艦長はほくそ笑みながら命令を下した。

「艦首一番から六番まで魚雷発射！」

命令と共に二隻の潜水艦の艦首から一隻につき六本。合計十二本の魚雷がまほろばに向かつて放たれた。

「沈め！ 世界の海は『地球の目』の領海だ。我々に齒向かう者への制裁だ！」

「ククク・・・精々足掻くがいいわ。」

「敵潜より魚雷発射音確認！ 一〇時の方向より雷数一二本！」

緑川水兵長が叫んだ。

「取り舵二〇度！ 対雷防御戦開始！ 九八式誘導噴進弾発射！」
東雲艦長は次々と的確に命令を下した。すると、その直後、三番主砲塔の左側にある装甲ハッチが開き、ミサイルサイロから四発の胴が太めのミサイルが発射された。

九八式誘導噴進弾とは、対魚雷防御用のミサイルであり、魚雷付近の水中に一発につき九〇〇個の弾子を撒き散らして魚雷を誘爆させる兵器である。また、カバーでできる範囲が広いので敵潜水艦に被害を与えることもできる。進路のコントロールは射手が担当する。

四発の九八式噴進弾は一二本の魚雷の未来位置を予測するように空中で太い胴が割れ、海中に弾子を撒き散らした。まず弾子の二発が敵潜から発射された一二本の魚雷のうち二本に命中した。直後、盛大な爆発が起こり、周囲の六本を巻き添えにした。残りの四本は進路がそれることなく、まほろばに向かってきた。しかし、それもすぐに、竜宮が発射した九八式誘導噴進弾により処分された。

「・・・すごい・・・！」

信は爆発により大きく盛り上がった海面を見て一言漏らした。

信は初めて目の当たりにする実戦に恐怖し、萎縮気味になりながらも同時にまほろばと竜宮の戦闘力の強さに目を瞠った。

信はまほろばの顔を見た。怖気づいている様子はなく、可憐ながらも凜とした表情をしていた。

「緑川君。敵潜の位置は？」

「本艦の一〇時の方向。距離は四〇〇〇メートルを保っています。」

「次はこちらが仕掛ける。取り舵二〇度！ 敵潜の側面に回りこんで艦首を向ける。」

「トリーカージ二〇度―！」

榊副長は復唱すると舵輪を操作した。まほろばは三〇ノットで回頭し、海面が盛り上がった。

「頼むぞ。竜宮。」

「お任せを！」

艦長の頼みに竜宮の艦魂は元気良く返事した。

「九式魚雷発射！」

伊 九〇〇竜宮の艦長・西村保憲大佐の命令が発令所に響いた。艦首方向の八門の魚雷発射管から九式魚雷が発射された。これはウォータージェット

と超電磁誘導推進を併用し、一八〇ノットを越える速度が出る魚雷であり、世界で最も速

い魚雷の一つである。八本の九式魚雷はアラストル 6 ネフライトに向かって突き進んでいった。

「地球の海全てを支配しようなんて許せない！ 九式魚雷をお見舞いしてあげる！」

正義感の強い少女・竜宮は力強く言った。

「攻撃は失敗です。全弾誘爆させられました。」
「くそっ！」

アラストル 6 ネフライトのゴード艦長は報告を聞くなり悔しそうに悪態をついた。その隣でアラストル 6 ネフライトの艦魂の女も「チッ」と悔しそうに舌打ちをした。

「再装填を急げ。」

気を取り直し、再び攻撃命令を下した。

「三時の方向に敵潜！ 距離三〇〇〇！ 大型です！」

攻撃命令はソナー手の叫びにかき消された。

「何？ 何故気が付かなかった？」

「それが・・・奴は推進器の音が聞こえず静かなのです！ それも図体に似合わず高速で

す！ 速力、およそ六〇ノット！」

「バカな！ そのような潜水艦などあるはずが無い！」

ゴーテ艦長にはソナー主の報告は到底信じられなかった。

「・・・！ 敵潜より魚雷発射音！ 雷数八！ 雷速一五〇ノット以上！」

「か・・・回避せよ！」

「間に合いません！」

総舵手は懸命に舵を操るも今まで経験したことが無いような攻撃に晒され、成す術も無かった。

「おのれ・・・！ 穢れた東洋の猿の分際で！」

アラストル 6 ネフライトの艦魂は鋭く端正な顔を醜惡に歪め伊 九〇〇竜宮のい

る方向を睨み付けた。

その直後、アラストル 6 ネフライトの右舷に九式魚雷八本のうち四本が命中し、長

身の船体をへし折った。同時に外れた四本も竜宮からのコントロールにより爆破され、へ

し折れたアラストル 6 ネフライトの船体を圧壊させた。

「竜宮より。我、敵潜水艦二番艦を撃沈せり。」

通信兵の報告に艦橋内に歓声が上がった。

「喜ぶのはまだ早い！ 本艦は一番艦を仕留めるぞ！」

東雲艦長は周囲に注意を促した。

「敵は三〇〇メートルに接近。一二時の方向です。」

「チャンスだ！ 一〇式魚雷、一番から一〇番まで発射！」

まほろばの艦首方向の発射管から一〇本の一〇式魚雷が放たれた。一〇式魚雷とは、九

式魚雷同様の超電磁誘導推進を採用している。更に、急加速用に口ケットブースターも装

備しており、ブースターに点火すると最大で二二〇ノットを超えることもできる。一〇式

魚雷は発射管から射出されると、まずは一〇〇ノットで走り始めた。

「アラストル 6 ネフライト爆沈！ マホロバ以外の敵艦です。」

「ぐぬう・・・」

ゴーテ艦長は齒軋りを始めた。

「ネフライト！」

アラストル 5 ジェイダイトの艦魂は驚愕の表情を浮かべた。

そして次の瞬間、烈火

のごとき怒りの表情に変わった。

「奴は何処にいる？ 探せ！ 妹の仇だ！ マホロバを殺せ！」

アラストル 5 ジェイダイトの艦魂はもはや冷静さを失っていた。

しかし、冷静さを失ったのが運の尽きで、新たなる攻撃がアラストル 5 ジェイダイトを襲った。

「マホロバより魚雷発射音確認！」

「振り切れ！ 増速しろ！」

アラストル 5 ジェイダイトは大きく面舵を切り、三〇ノットまで増速した。

「敵艦増速！ 三〇ノットで遠ざかります。」

「水雷管制。 ブースターを点火せよ！ 敵さん、ビックリするぞ。」

東雲艦長は迅速に命令を下した。

一〇式魚雷は急に加速を始め、敵潜に追いつこうとしている。

「ブースター？ 魚雷に？」

信はブースターが装備された魚雷など聞いたことがなかった。

「そう。 私に積まれている魚雷の中では最新型のもの。 最大で二〇〇ノットを超える。」

「二〇〇ノット！」

常識を超えたスペックを語るまほろばに、信はいつも以上に驚いた。

「あつ・・・！ ぎよ、魚雷が急加速しました。 二〇〇ノット近く出ています！」

「馬鹿な！ そんな魚雷が何処にある？ ええい！ 回避しろ！」

ヘルゴストス艦長は真っ青になり、慌てふためいて命令を下した。

「回避不能！」

操舵手の悲痛な叫びが発令所に響いた。

「この私が・・・あんな戦艦に劣るといのか！」

アラストル 5 ジェイダイトの艦魂は青ざめながらも声を絞り出して叫んだ。

直後、アラストル 5 ジェイダイトの艦全体に激しい振動が走

り、発令所にも及ぶ浸

水が起こった。一〇本の内、六本が立て続けに命中し船体は三つに折れた。アラストル、

5 ジェイダイトは海の藻屑と化した。

「艦長。敵潜撃沈。」

緑川水兵長はさらっと報告した。すると、艦橋が先ほどより沸き立った。

「皆、良くやった。特に水雷科には褒美を取らそうではないか。」

東雲艦長は満足そうな表情でねぎらった。隣で榊副長もいつもに増してニツコリとしていた。

「竜宮より通信。《貴艦の健闘に敬意の念を表す。一〇式魚雷最強なり。》以上。」

竜宮からの通信は手放しの賛辞であった。それを聞いて東雲艦長は返信の内容を通信兵に伝えた。

「緑川君。《本艦が戦えるのは毎度の貴艦からのプレゼントのおかげなり。》このように伝えよ。」

通信兵は早速、竜宮に返事を送った。

「やつぱり君は凄いよ！」

信はまほろばに満面の笑みを向けてた。

「みんな一生懸命戦っている。だから、みんなを護るのが私の役目だから・・信も護る。」

「え？」

信はまほろばが最後に何か呟いたのを聞いた。

「うつん、何でもない。」

まほろばはそう言つと、窓の外に向き直り、水平線の彼方を見つめた。

【第六章・小笠原沖海戦】（後書き）

地震の影響で（言い訳すんな！コラ！）更新が大幅に遅れましたがうpします。艦魂キャラも増え、敵艦も登場しました。

さて、問題です。敵艦の名前には「ネフライト」のように宝石の名前を付けていますが、これの元ネタは何でしょうか？ 分かった方にはオプーナを買う権利を差し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7019o/>

時の艦～時空の戦艦まほろば～

2011年10月7日00時46分発行